# 國語讀本

新制版

清水次郎長様

375.9
Ue4
資料室

42513
教科書文庫
4
810
44-1933
20000
54737

文部省檢定濟

昭和八年二月廿五日・中學校國語漢文科用
昭和九年七月廿四日・實業學校國語科用

# 國語讀本 卷二

新制版

文學博士 上田萬年
榮田猛猪
鹽野新次郎 共編

広島大学 教 54737 図書

資料室

375.9 Ue4

# 國語讀本 卷二

## 目次


| | | |
|---|---|---|
| 一 魚の旅 | 薄田泣菫 | 一 |
| 二 芋ほり | 長塚節 | 六 |
| 三 オリンピック大會の今昔 | 行田重治 | 一三 |
| 四 美しき球 | 矢島鐘二 | 二〇 |
| 弓箭の爭 | 賴山陽 | 二六 |
| 五 虎狩 | 德川義親 | 二七 |
| 六 御所柿 | 正岡子規 | 四〇 |
| 柹の禮狀 | | |

柿五句

七　噴煙　夏目漱石　四五

八　東西兩雄の意氣投合　小笠原長生　六〇

九　人物試驗　新渡戸稲造　七〇

一〇　曾呂利新左衞門　湯淺常山　七五

一一　會得　沼波瓊音　八〇

一二　氣合　鶴見祐輔　八四

無手勝流　依田學海　九六

一三　雀　北原白秋　九七

一四　感謝　野口米次郎　一〇三







一五　わが幼き頃　新井白石　一〇五

食牛の氣　安積艮齋　一一三

一六　吹雪　阿部次郎　一一四

一七　色紙の勳章　下村海南　一二一

一八　鳳潭　池田林儀　一二九

一九　我が袖の記　高山樗牛　一三七

一　熱海の冬　一三七

二　三保の春　一三九

二〇　爆彈三勇士　與謝野寛　一四一

二一　月雪花　芳賀矢一　一四五

二二 滿洲國の住み心地 上田恭輔 一五二
二三 伊能忠敬の晩學 幸田露伴 一六二
二四 明治神宮 白鳥省吾 一七一
二五 明治天皇の御遺物を拜す 笠井信一 一八〇

目次終

薄田泣菫　名は淳介。岡山縣の人。大阪毎日新聞社員。詩人。隨筆家。

# 國語讀本 巻二

## 一 魚の旅

薄田泣菫

「魚の水を離れたやうなものだ。」とは、頼りを失つて、手も足も出ない場合に用ひる言葉だが、しかし魚の中には、水を離れても、ある期間は立派に生き存へてゐるのがある。南アメリカの熱帯地方に棲んでゐるある魚族は、池が狹くて、強烈な太陽の熱に遠からず水が干上らうといふおそれがある場合には、あらかじめそれを感づいて、もつと廣く、もつと

冷い水をもとめて、漂泊の旅に上る。そして森の濕地から濕地へと、幾百といふ魚が群をなして、夜を日に繼いでぞろぞろと動いてゐるといふことだ。

薄田泣菫

私も一度山越しの夜道に、草鞋の底で長い繩片のやうなものを踏まへたことがあつた。手にさげた提灯の明りをさしつけて見ると、それは砂まみれになつた鰻だつた。

「あ、びつくりした。足の裏がぬるつとして滑りさうだつたから、てつきり長虫だらうと思つたが……。」私は後から來





る連の男に呼びかけた。「何だつてまた、鰻がこんなところにまご〳〵してゐるんだらう。」

「すつかり秋だな。もう落鰻の時節に入つたのだ。」

連の男はそこらをのたくつてゐる鰻に落した眼をあげて、暗い空を見た。

空には星がきらびやかに瞬いて、銀河が白く帶のやうに落ちかゝつてゐた。

「秋だな。」

と、連の男はも一度繰返していつて、秋になると鰻は卵を産みに、山の上の湖から、高原の池から、沼から、小流から、てんでに這ひ出して來て、あらゆる困難に堪へつゝ、河を下つて

フィリッピン 東印度諸島中北部に散在する群島。米領。

海に入り、長い旅を續けて、遠くフィリッピンあたりまで行くらしいが、その生活の細々したことは、まだはつきり分らないのだといふやうなことを話して聞かせてくれた。

「奴さん、もうそろ〳〵旅に出たくなつて、そこらの池から、闇にまぎれてぬけ出して來たのさ。」

「へえ、それぢや、お前もそんな長旅をしてゐる一人なのか。さうとは知らないで、草鞋で踏みつけて濟まなかつたな。」

私は砂まみれになつた身體のどこかに、傷でも負はせはしなかつたらうかと、氣がかりになつて、提灯の明りでそこらを捜し廻つたが、鰻はもう地べたに姿を見せなかつた。

道の片側には、夜露を帶びた雜草の葉が茂り合ひ、その蔭





をあるかないかの水がちよろ〳〵と流れてゐた。遠い海への長旅に絶えず氣をとられてゐる鰻は、私たちの氣づかないうちに、いつのまにか草をもぐつて、その中に滑り込んだらしかつた。

「まあ、よかつた。」

私は口の中でさう言つた。そして、あの粘り強い生命の力さへ失はなかつたら、ちつとやそつとの傷はあつても、それはすぐに癒えついて、自分に負はされただけの旅の役目は、屹度しおほせるだらうと思つた。

私たちはまた夜道を急いだ。

（草木虫魚）

長塚節（たかし） 茨城縣の人。文學者。歌人。大正四年歿、年三十七。

鬼怒川 栃木縣日光山の奥栗山村の鬼怒沼に發し茨城縣に入つて利根川に合する。

をだ 刈稲をかけるために組立てた竹の棚。

# 二 芋ほり

長塚節

小春の日光は岡の畑一杯にさしかけてゐる。岡は田と櫟林と鬼怒川の土手とで圍まれて、他の一方は村から村へ通ふ街道へ下りる。田は岡に沿うて狹く連つてゐる。田圃を越して、竹藪交りの村の林が田に沿うて延びてゐる。竹藪の間から草屋が隱見する。箒草を中途から伐り放したやうに枝をひろげた櫸の木が、そこにもこゝにもすくすくと突つ立つてゐる。田にはもう掛稻は稀だが、「をだ」がまだ外されずに立つてゐる。「をだ」には黄昏に鴫でも來てとまるくらゐの事であらう。見るから寂しげである。



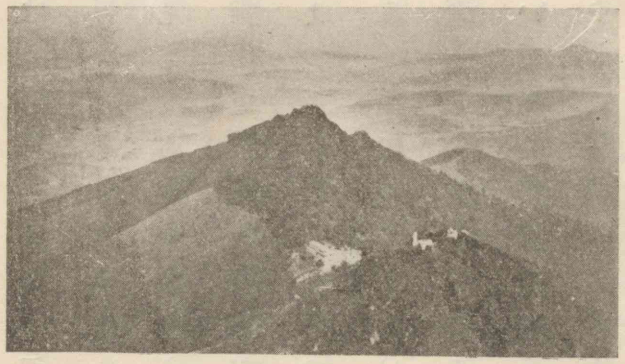


筑波山 茨城縣にある。標高八七六米。

鬼怒川の土手には篠が一杯に繁つてゐるので、近くの水はその蔭に隱れて見えぬ。上る白帆は篠の尖に半分だけ見えて、しかも大きい。土手の篠を越えて水がしら〳〵と見えるあたりは、もう遙かの上流である。だから、篠の尖を離れて高瀨舟の全形が見える頃は、白帆は遙かに小さく蹙まつてゐる。土手の篠の上には、對岸の松林が連つて見える。更に其の上には、筑波山が一脚を張つて、他の一脚を上流までのばしてゐる。小春の筑波山は常磐木の部分を除いて赭（あか）く焦げたやうである。其の赭い頂上に、點を打つたやうに觀測所の建物がぽつちりと白く見える。稍、不透明な空氣は、なほ針の尖でつゝくやうに、其の白い一點をきは

兩毛　上野・下野。

やかに眼に映ぜしめる。



筑波山

櫟の林は此の狹く連つてゐる田と鬼怒川との間を繫いで横に續いてゐる。田も遙かのさきは櫟林に隱れて、鬼怒川も上流はいつか櫟林に見えなくなる。櫟の木には赭い葉がびつしりとついてゐる。岡の畑は向ふへ傾斜をなしてゐるので、中央に立つて見ると、櫟の林は半ば隱れて、低い土手のやうに連つて見える。林の上には雪を戴いた兩毛の山々がぼんやりと白





い。此の如き周圍を有して、岡の畑は朗かに晴れてゐるのである。

二三寸に伸びた麥は、岡一杯に薄く緑青を塗つたやうである。そこにもこゝにも百姓が小さく動いてゐる。麥の根に培つてゐるものもあるが、大抵は芋掘の人々である。四五人の手で芋を掘つてゐる畑の縁には、馬が茶の木に繫いであつて、空俵がころがつてゐる。馬が退屈まぎれに茶の木の葉をむしることがある。其の時一人が駈けて來て、轡をがちんと一つきめつけて叱り飛ばせば、またおとなしくなつて、ばさり／＼と尾を動かす。銘々の手もとは忙しい。しかし岡はたゞ長閑である。

日は稍、傾いた。忽ち筑波山の頂から眩い光がきら〳〵とさして來た。毎日同じ時刻に、此の光が此の岡へさして來る。或者は、筑波山で火を燃すのだらうといつてゐる。併しそれは觀測所の硝子窓が日光を反射するのである。岡の畑に變化が起つたとすれば、數時間に唯、これだけである。硝子窓の反射はやがて消えてしまつた。芋掘の人々は、勿論此の光を知らなかつた。

兩毛の山々がぼんやりとした日は、西風が吹かないので隨つて暖かい。暖かい日は、土いぢりの芋掘には此の上もない日和である。と、みれば、男と女とが街道へおり口の小さな畑で芋を掘つてゐる。桑畑は葉が大方落ちて、あたりの





芋畑へも散らばつてゐる。青いよわ〳〵した小麥が生え出してゐる。小麥は芋の間に二畝づつ蒔かれてある。芋の莖はぐつたりと茹でたやうである。女は芋の莖を、菜刀でもとから切つて先へ出る。菜刀といふのは庖丁のことである。後から男が鍬のさきで芋の株を掘りおこす。びかびかと光る鍬の先を、ざくつと芋の株へ斜に突きたてて、どつと鍬を持ちあげると、大きな芋の塊がふはりと浮出る。鍬をそつと拔いて、先の株に移る。小麥に障らぬやうに極めて丁寧に掘つては、先へ〳〵と行く。女は莖を切り了ると、後へもどつて、掘つてある土の塊を二尺ばかりあげて、どさりと打ちつける。こまかな土がほぐれ、こゞつた子芋の

塊から白い毛のやうな根がじろつと現れる。それから芋と芋とを左右の手のひらでぶり〳〵とはがして、やがて俵を立てて入れる。さうして穴の土を手の先でならして、先の塊をほぐす。乾いた畑に、濕つた圓い穴のあとが一つづつ殖えて行く。日光が其の土をあとから〳〵と細かに乾かして行く。芋の株を掘つてしまふと、男は鍬についた土を草鞋の底でこき落して、茶の木の株に腰をおろし、鉢巻を取つて、額を拭いた。小春の暖かさは、ちく〳〵と痛いやうに、痒いやうに肌を刺戟して、毛穴からは汗がにじみ出すのである。（長塚節全集）

行田重治　運動家。東京日日新聞記者。昭和五年歿。

## 三　オリンピック大會の今昔

行田重治

世界的最大行事は果して何かといへば、いろ〳〵な行事が數へられようが四十また五十有餘國の精鋭「わしが國さ」の代表を世界の一角に集めて、人種の優劣を競ひ、世界的順位を爭ふ萬國オリンピック大會――これこそ世界的最大行事といはねばならない。

萬國オリンピック大會――これは既に三つ兒も知る世界的な共通語となつてしまつた。オリンピックといふ言葉が何を意味するものであるかを知らない者が、今日果して幾人あらう。一度「わしが國さ」の代表を遣つた國は、朝野

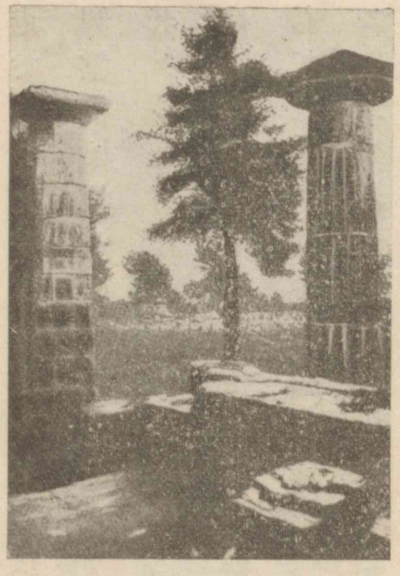
エリス 希臘ペロポネサス半島の西北。
ゼウス 希臘諸神の主宰者。オリンプス山に鎭座する。

擧つて母國選手の健闘を祈り、その結果を鶴首する。政治家も軍人も青年も、老幼も、あらゆる人々を熱狂させるのが、現今、四年目ごとに行はれる萬國オリンピック大會である。このオリンピック大會はいつ、いかなる姿をもつて發祥したものであらうか。

古代ギリシヤでは、國民大祭として、毎年一つづつ大祭を行つてゐたが、その大祭は四つあつて、四年で一巡したものである。その四つのうち、最も有名なのが卽ちオリンピア大祭で、ギリシヤ聯邦の一なるエリスの海岸にあつたオリンピアといふ一寒村に、ゼウスといふ神が祀られてゐて、このゼウスの神意を慰めるために行はれたのであつた。祭



典は四年目に一回づつ夏至卽ち六月二十一日の次の第一の滿月の日から四日間行はれ、その前後一箇月の間はギリシヤの各邦は絶對に戰爭をしなかつた。またこの競技會に出場すべき者は、各邦から選ばれた粒選りの精鋭で、しかも純ギリシヤ人の血を受け、政治上、道德上、並びに法律上の刑罰を受けたことのない者に限られ、全く缺陷のない人格者でなければならなかつた。これを以て觀ても、いかに祭典の崇嚴と競技の神聖とが期せられ

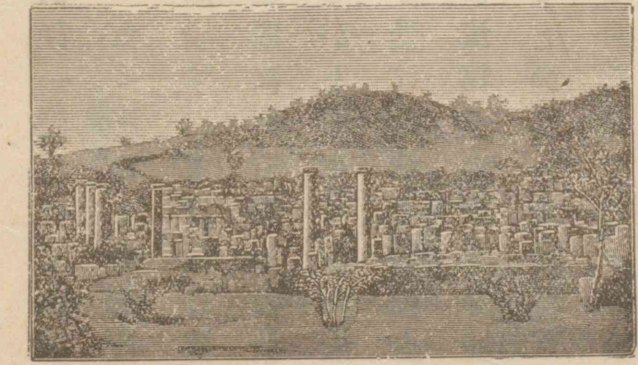


ゼウス神殿址

フィールド field. 走路によつてかこまれた中央の競技場。
レスリング Wrestling. 西洋流の相撲。むしろ柔道に近い。
ボクシング Boxing. 拳闘。

てゐたかが知れよう。

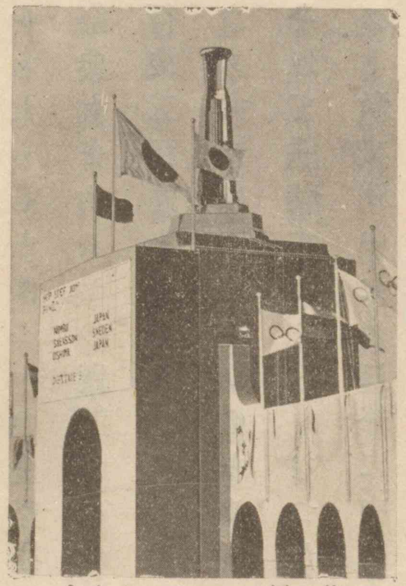
競技の種類は主として短距離競走であつたが、フィールド競技では、圓盤投・槍投、その他跳躍・レスリング・ボクシングなど、特殊なものとしては戰車競走・騎馬競走、組合せ競技としては幅飛・圓盤投・槍投・徒歩競走・レスリングの五種をとりまぜた五種競技などが行はれ、その眞劍さと熱のある點とは言語に絶するばかりであつた。


オリンピア競技場の廢墟



オリーブ 橄欖樹、即ち月桂樹。
モデル Model.

だから、この競技會に優勝した者は、物質的な賞品の代りに、この聖地に生じたオリーブ樹で作られた冠を授けられ、公衆の限りない歡呼を受けたものである。さうして更に、神域の一部にはその像が建てられ、詩人は彼を謳ひ、彫刻家はモデルにし、また作家は、劇の主人公に選んで名譽を表彰し、彼の名前は直ちに年號に用ひられるなど、その優勝者を出した一家一門、並びに各邦の名譽は、實に輝かしいものであつた。


第十回オリンピック大會

アテネ
スパルタ
ともに古代ギリシヤ聯邦の國々で、アテネは文を以て、スパルタは武を以てギリシヤの兩中心となつた。

第一回擧行　西曆前七七六年。

テオドシウス　東ローマの皇帝。キリスト教の興隆をはかつた。西曆三九五年崩。

アテネ・スパルタの文武が謳歌されたのも、この當時で、オリンピア祭典の影響は、やがてかの燦然たるギリシヤ文明をもたらし、ギリシヤの全盛期を形づくつた。然るに、この祭典も、ギリシヤの衰退と、その文明の凋落と共に、第一回擧行後二百九十八回目、西曆紀元後三百九十四年に、テオドシウス大帝により、一切のギリシヤ・ローマの舊い宗教を國法を以て嚴禁することゝなつたので、オリンピア競技は、キリスト教文明のために終に中絶する時が來た。

しかしその廢絶後千五百年以上も經つた十九世紀の末葉、フランスに男爵クウベルテンといふ文筆家があつたが、彼は青年の遊戯並びに體育に熱心であつた結果、その斡旋



ストックホルム　瑞典の首府。

により、萬國體育委員會といふものが組織され、千八百九十五年、パリにおいて第一回會合があり、古代オリンピア競技に準じて、四年目ごとに國際大競技會を催し、且その開會の時と場所とは、その都度、委員會に於て決定することゝなつた。かくて復活後の第一回オリンピック大會は、翌千八百九十六年の四月に、その由緒も深い古代ギリシヤ文明の搖籃地であるギリシヤの首都アテネに於て盛大に催された。

第十回オリンピック大會競技
（南部選手のホップ・ステップ・ジヤンプ）

日本は、スウェーデンのストックホルムに行はれた第五

第五回オリンピック大會　西暦一九一二年。

矢島鐘二　秋田縣立角館中學校長。

戰の幕　大正十年九月清水善造が米國フォーレストヒルの庭球デヴィスカップ戰に於て米國選手チルデンと試合した。

回オリンピック大會以來、代表選手を派遣し、各選手は陸上に、水上に盛んに活躍して、日本のために萬丈の氣焔をあげ、日本をして世界的スポーツの新進國たらしめた。

## 四　美しき球

矢島鐘二

戰の幕は切つて落されました。こゝニユーヨークを距る二十哩、理想的運動場として有名なるフォーレストヒルの清らかなグランドの上には、白線が美しく浮いて、何となく純化されさうな氣分が漂うてゐます。老幼と男女とを問はず、世界各國の人が、ひしとばかりに鮨詰に、グランドの周に寄せ重なつて、この展開された場面に、兩選手の出場を



チルデン　米國庭球選手。世界選手權所有者。

清水君　名は善造。群馬縣箕輪町の人。三井物産會社員。

待構へてゐました。チルデン君の上に幸福あれかしと祈る人の心と、清水君の上に優勝の幸せんことを祈る人の心とが、平和な光の中に照り映えてゐました。

この光の中に、この無聲の應援の中に、凜とした決意と慘憺たる苦衷とを想はせつゝ、微笑を浮べて、二人はテニスコートに現はれました。チルデン君は體重二十一貫、身長六尺二寸、清水君は五尺四寸五分の身長ですから、まるで大人に子供が向つたやうであります。觀覽席で異口同音に、「氣の毒だが清水君は駄目だらう。」とさゝやくのが、清水君の耳に聞えました。

火蓋は切られました。隙を窺ひ虚を衝く龍虎の爭が始

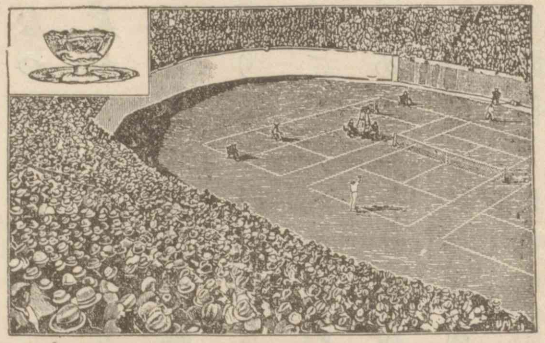
まりました。秒一秒、チルデン君と清水君との球が冴えて來ました。觀覽者は、かの球の動くがまゝに、その美しい碧綠の瞳の數々を、忙しさうに動かしてゐました。一心不亂に見入つて据ゑた瞳に、傷はしやチルデン君の、片足辷らして取亂した姿が映りました。米人は驚倒しました。躍起となりました。この時です、清水君は、チルデン君の血走つた目許に、取亂した脚下に、柔かい程のよい球を送つてやりました。この瞬間に於ける君は、優勝した時の名譽の感情も、自尊の精神も全く念頭にはありませんでした。

「ミスターシミヅ！」の歡呼の聲と共に、米人三萬の手が、林の如く一齊に振上げられました。あゝこの一事清水君も





清水君ですが、米人も米人であると思ひます。初めコートに出た時、チルデン君の眉宇の間には、清水君に對する侮蔑の情が、あり〳〵と見透かされましたので、心ある米人は、その態度に少からず不安の念を懷いたのであります。然るに清水君は、出場早々、この冷たい侮蔑に報ゆるに、溫情春の如き球を以てしたのでありますから、その親切は電氣のやうに米人の胸にも響いて、感謝感激が心の底から湧上つたことでありませう。英人の如きは、清水君が永らく印度に職を勤



清水チルデンの試合とデヴィスカップ

上泉伊勢守　名は秀綱。上野箕輪の人。武藝者。神陰流の祖。

めてゐた關係もあり、日英同盟の情誼もあり、日本の應援者の少い關係も手傳つてでありませうが、すつかり清水贔負になつて、盛に推奬しました。當時ニューヨークには群馬縣人が五十五人居りましたが、所謂上州長脇差の氣象から、この日は總動員で應援に參加してゐました。この敵味方總掛りの歡呼は、單なる妙技に發するのではなくして、その精神に對する力强い感激に發動してゐます。上泉伊勢守も定めし地下に感泣したでありませう。

時は一點一分を爭ふ時であります。五月・六月・七月・八月の四個月に亘り、十二個國の選手を薙倒して、最後の決勝に入つた時であります。若し今明二日間の米選手との競技に於て勝を制するならば、日本開闢以來のデヴイスカップを獲得する事の出來る時であります。この時に於てチルデン君の心中を察して、同情の球を手元に送つた清水君は、實に偉いと思ひます。而も清水君が「汝は汝にして汝にあらざる時」であり、日本を背負うて立つてゐる事を自覺して執つた自重自愛の態度は、實に敬服の外ありません。

デヴイスカップ　米國の富豪デヴイスが、各國選手の庭球競技に於ける優勝者に贈るを例とした大型で精巧なカップ。

人格の修養といつて、いきなりお釋迦樣や孔子樣の眞似をしようと思つても、私共にはなか〳〵むづかしい。私共に取つて一番早い一番近路の修養法は、お互に親切同情を心がけ努める事であります。錢を粗末に遣ふ人は、貧乏になつて生活に困る。體を粗末にする人は、病氣になつて苦

しむ。親切同情の精神を粗末にすれば、おしまひには人として困る事になります。時代は如何に推移しようとも、フオーレストヒルに現はれた清水善造君の運動道徳の精神、貴く美しい球の精華は、蓋し不朽の光輝あるものと信じます。今や歐米の人、否、世界の人が、清水君を慕うて已まないのは、誠に理の當然、情の自然であります。（スポーツマンの精神）

## 弓箭の爭

賴山陽

「武田信玄は、國海に濱せず。」「鹽を東海に仰ぐ。」「今川氏眞、北條氏康と謀り、陰に其の鹽を閉づ。」甲斐大いに困しむ。上杉謙信之を聞き、書を信玄に寄せて曰く、「聞く、氏康・氏眞、君を困しむるに鹽を以てすと。不勇不義なり。我、公と爭へども、爭ふ所は弓箭に在りて、米鹽に在らず。請ふ、今より以往、鹽を我が國に取れ。多寡は唯、命のまゝなり。」と。乃ち賈人に命じ價を平かにして之を給せしむ。（日本外史）

賴山陽　名は襄。安藝の人。儒者。天保三年（二四九二）歿、年五十三。
氏眞　義元の子。駿河に居た。
氏康　氏家の子。相摸に居た。



## 五　虎狩

德川義親

トラッカーからの報告があつて、昨日と同じ場所に二頭、負傷したのは川を跳び越えたまゝ、其邊に停つてゐるといふことです。一同今更に勇み立ち、私も吉井君も共に口にこそ出しませんが、心竊かに期するところがあります。勢子の者共はダトウ、アブドゥラーの命令によつて勢揃

德川義親　侯爵。貴族院議員。
トラッカー　Tracker. 猛獸の搜索追跡を專門とする者。
昨日と同じ場所　馬來半島ジョホール王國ムーア市に近いパリ、ジャミル村の叢林。
吉井君　吉井信照。筆者の同行者。陸軍大尉。
ダトウ、アブドゥラー　ジョホール王國ムーアの頭領。ダトウは王族・頭領・酋長などいふ意。

マラッカの海　マラッカ海峽。馬來半島とスマトラ島との間。

ひをして、各、の部署に向つて進發しました。吾々も亦獨木舟に乘じて、椰子や雜草の繁る小川を海岸まで下りました。風は全く凪いで、汪洋たるマラッカの海には漣さへ立たず、靜かに湖の樣に穩やかです。椰子の茂る砂濱には鰐が何疋も、あらはに容赦なく照りつける日光に背中を干して、晝寢の夢を貪つてゐます。石も爛らす樣なこの酷熱に、鰐は更に暑さも感じないのでせうか、魚を澤山呑み込んだ夢なんか見ながら、よくまあ呑氣に、あゝして寢てゐられるものだと思つて感心しました。

虎が近いので鰐の夢を驚かすことも出來ず、海岸を迂回して虎の潛んでゐる椰子林の前に、部署を定めて陣を布き

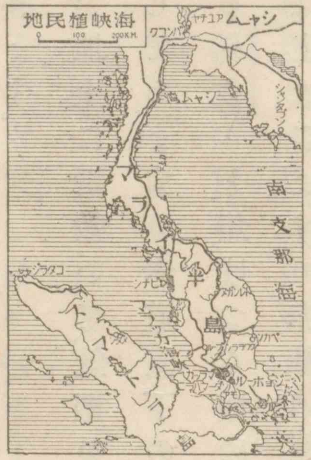


今日　大正十年六月十四日。

バイタム　阿弗利加人のトラツカー。

ホルン　Horn.

ました。昨日より後にさがつただけです。昨日は小川を後にしたのが、今日は椰子林を隔てゝ小川を前にし、昨日と同樣、海を左手に、波打際から三十間程のところに吉井君と二人で立ち、更に三十間程右手にダトウ、アブドゥラーが立ちました。一本の椰子の木の根方の生ひ茂る草を、手の及ぶ限り獵刀を以て伐り拂ひ、足場を拵へて、展望のきく樣にしました。



馬來半島

午後三時半、バイタムの肩にかけた角笛（ホルン）が一聲、椰子林の彼方に響くと思ふと、勢子は一齊に總攻擊を開始しました。

ドーン、ドーンと爆竹の爆發する音は椰子林の寂寞を破つて木靈に響き、マラッカの海の波を越えて遙かに消えてゆきます。

地上に折敷いて、銃把を握りつめて、油斷なく前方を注視してゐます。赤道直下の直射する熾烈な日光が頭上からぢり〱と焦げつく樣に照し、汗は流るゝそばから蒸發してしまひます。赤蟻の襲撃は昨日にも增して激しく、ぞろぞろと這上つて來て、何の恨か知りませんが、遠慮も會釋もなく襟頸に咬みつきます。火攻め蟻攻めの苛責、尙前には兇暴極りなき手負虎を控へてゐるのですから、寸刻も氣を許すことが出來ず、非常な苦痛を忍ばなければなりません。

兵隊　ジョホール王國の兵隊。

手負うた猪の猛烈なことはよく人の知つて居ることです。猪よりも遙かに狡猾にして、敏捷兇惡な虎が、手負になつた時の獰猛さ、觸るゝもの悉く粉碎せんとする勢は、想像に難くはないでせう。而もこれを刺戟して激怒せしむるに至つては、其の獰惡さは最早論外です。無謀の極端にして、蠻勇の行き止りでせう。

勢子も犬も怖いから中々進んで來ません。吾々は極度に緊張してはゐますが、ぢつとして身動きさへせず、靜かに椰子の根方に身を寄せて待つてゐます。四時、四時半、五時、勢子の叫び・爆竹・犬の聲は漸く迫つて來ました。勢子廻しの兵隊が高い椰子の木に攀ぢ登つては勢子を指揮してゐ

るのが見えます。

此の時、吾々の左手五間とは隔たらない叢が、がさ〳〵と動きました。はつとして立ち上つて見ると、一頭の虎が、三尺程に薙ぎ倒しておいた草の下を、どう來たものか巧みに潜行して迫つて來たのです。其の黄色い斑文のある背が纔かに現れたばかりです。射撃する間もあらばこそ、見えたのは瞬間で、其の後は草が、再びがさとも動きません。吾吾は今虎の背の見えた處に走つて行きましたが、姿は更にない。其の敏捷さ、引返したものか、後に拔けてしまつたのか、見當がつきません。足跡は微かに認めますが、方向の判斷がつく程明瞭でありません。二人は危險を感じつゝも





ジャングル Jungle.

草の中を歩き廻つて捜してゐるところに、もう左手の波打際の方からは逐ひ終つた勢子が叢林（ジャングル）を出て來ました。バ、イタムもやつて來て虎の背を見た話をきいて、その足跡を丁寧に檢し、其の逃げた方向を求めてゐます。もう駄目と諦めて、ダトウ、アブドゥラーも此方に歩を移しました。バ、イタムは、どうも足跡が明かでないけれども虎は後に拔けたのかも知れないといふので、ダトウは自分の鐵砲を兵隊の一人に貸し與へて後方の偵察に出し、バ、イタムも足跡をつけて捜しに行つてしまひました。山刀を持つたり槍を携へたりした勢子は二人・三人と前面の叢林（ジャングル）の中から出て來ます。あゝ、今日も駄目！緊張しきつてゐた氣も弛んで、

鐵砲の撃鐵を下し、疲れたまゝに鐵砲を杖にして椰子の木に倚り、浪の穏かなマラッカの海に、遠く目をやつて眺めてゐました。

マラッカ風景

わつといふ只ならぬ叫び聲。何事!?と鐵砲執り直し振向くと意外にも、吾々の右手に纔か逐ひ殘した叢林(ジャングル)の中から、突如として猛然跳り出した九尺にも餘る猛虎。一時は彼方に外れるかと見るまに、忽ち身を翻し、吾々に向つて眞正面から襲撃して來ました。三十間とはない距離から虎は敵を威嚇せん爲か、ウオーッと一





聲、椰子の林を震はす様な低く力の籠つた唸聲(うなりごゑ)を發し、身を潜めるや、忽ち跳躍して、双の如き牙をむき、利鎌の様な爪を露(あらは)して、襲ひかゝつて來ました。私は咄嗟の間に撃鐵を起し、椰子の根に片足をかけたまゝ小楯にとり、鐵砲を肩に付けるや一發。同時に左斜後にゐた吉井君も發射しました。

虎は殪れません。益、怒つて、其の勢の猛烈なこと、其の姿の物凄いこと、さながら怒濤のひた押しに押寄せる如くに、叢を躍り越えて向つて來ます。一高一低、照準は困難です。彼の跳躍する毎に、距離は彌、縮まつて、十間、七間、遂に五間、お互に顧る餘裕はありません。私は此の一發に千鈞の重みをかけて引金を引くのです。十分に照準して、稍、拳下りに

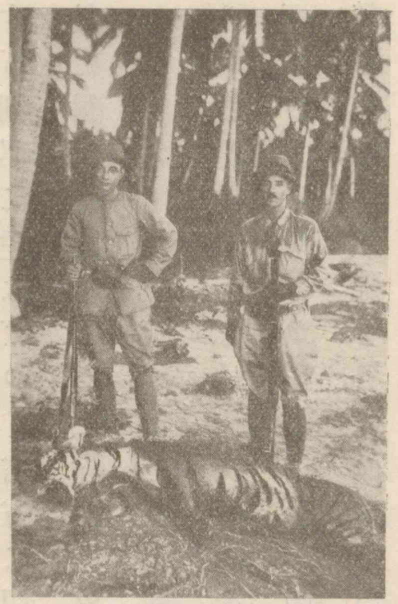
轟然火蓋をきつた第二彈！　銃口に火箭が迸り、硝煙颯と散じて、而も尙虎は斃れず、更に跳躍、物凄い怒號、私を目がけて躍りかゝる樣に衝き進んで來ました。彈丸は外れたか？　もうかうなれば、外に採るべき手段はありません。斃すか、斃されるか。白兵戰を演じて、以て最後の勝敗を決するだけです。

度胸を据ゑて椰子を小楯にとり、鐵砲を肩につけて、ぢつと瞬もせず、虎を見つめてゐました。此の瞬間、身に危險の迫る其の刹那、實に一秒とはない瞬間に、私の眼底に燒付ける樣に映つたのは、彼の冴えた黃色に鮮かな黑い條文のある背中、爛々として人を射る如き雙眸、銀髯、血の色をしたそ





の紅の口でした。頭は非常に銳敏に淸澄になつて、樣々な想が電光の如く腦裡に閃きます。最後に「危い事を遊ばさないで。」といはれた言葉が、はつきりと心に甦りました。併し今は寧ろ冷かに、虎の一擧一動を看守つてゐるのです。



吉井大尉　虎　德川侯

危險を脫する最後、の而して唯一の手段は、ぢつとしてゐて、肩につけた鐵砲の銃口に虎の體が觸れた時、始めて發射し、間髮を容れざる瞬間に、身をかはして虎をやり過すことです。

猛襲！虎の兇惡獰猛な姿が、彌、肉薄してきて、今や一間半、もう一跳びで私の身に達するところまで近づきました。今度の一跳こそ勝敗の分るゝところ、將に引金を引かんとする刹那に、虎はぱつと右方に切れました。不思議！虎は敵に對して斃れるまで、飽迄も攻撃して決して逃すことがないものです。何故私を見逃して横に切れたのでせうか。それは兎も角も、私は一時危地を脱したのです。或は振り返りざまに飛びかゝつて來るのではあるまいかと思ひ、姿勢を崩さず、鐵砲を肩につけてゐると、虎は其の儘に走り過ぎて、三間、四間と遠ざかつてゆきます。こゝで再び逃してはと、追打ちをかけると、一大咆哮と共にどつと顚倒して、叢





の中に姿を沒してしまひました。よしッ！占めた！今度こそ慥だ！と思つて、草の尙、波の樣に動搖するところを狙つて一發放しておいて、鐵砲を構へて樣子を窺ひながら、靜かに近寄りました。叢の中に、森の勇者として猛威を振ひ、百獸を懾伏せしめた虎も、今は氣息奄々として倒れてゐます。吾々の姿を認むるや、また頭を擡げて牙をむいて、跳び掛る勢を示しましたが、ぢきに其の力も竭きて、次第に動かなくなつてしまひました。

ほつとして吉井君と顏を見交したまゝ、一言も發しません。緊張してゐた氣が弛むと、急に汗がだく／＼流れ出しました。豫期しなかつた出來事に吃驚した人々も漸く落

ダトウ、ダウト　ジョホール國王の從臣。
サルタン　王樣の意。
正岡子規　俳人。名は常規。獺祭書屋主人・竹の里人の別號がある。明治三十五年歿、年三十六。
神戸の云々　二十七八年戰役に從軍したが持病がひどくなり歸つて神戸で入院した。
故郷　松山市。
腰の病　脊髓病。

着いて、虎の周圍に集つて來ました。ダトウ、アブドゥラーとダトウ、ダウトは殊に喜んで、私の肩を固く抱いて、「お日出度う、よくやつた。サルタンに君が勇敢に虎を打止めた事を申上げよう。」といふて、祝つてくれました。（ぢやがたら紀行）

## 六　御所柿

正岡子規

明治二十八年、神戸の病院を出て、須磨や故郷をぶらついた末に、東京へ歸らうとして大阪まで來たのは、十月の末であつたと思ふ。その時は腰の病のおこり始めた時で、歩くのに少し困難を感じたが、奈良へ遊ばうと思うて、病を推して出かけて行つた。



三日ほど奈良に逗留の間は、幸に病氣も強くならんので、余はおもしろく見ることができた。

正岡子規（淺井忠筆）

この時は柿が盛になつてをる時で、奈良にも、奈良近邊の村にも、柿の林が見えて、何ともいへない趣であつた。柿などといふものは、從來詩人にも歌よみにも見はなされてをるもので、殊に奈良に柿を配合するといふやうなことは、思ひも寄らなかつたことである。余はこの新しい配合を見つけ出して、非常に嬉しかつた。

或夜、夕飯も過ぎて後、宿屋の女中に、「まだ御所柿は食へまいか。」といふと、「もうあります。」といふ。余は國を出てから十年ほどの間、御所柿を食つたことがないので、非常にこひしかつたから、早速「澤山持つて來い。」と命じた。やがて女中は、直徑一尺五寸もありさうな錦手の大どんぶり鉢に、山の如く柿を盛つて來た。流石柿好きの余も驚いた。それから女中は余の爲に、庖丁を取つて柿をむいてくれる。

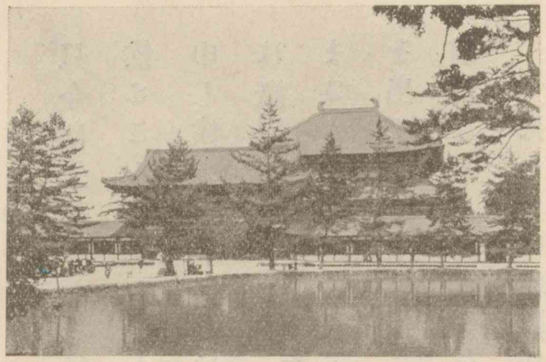
やがて柿はむけた。余はそれを食つてゐると、彼は更に他の柿をむいてゐる。柿も旨い。場所も良い。余はうつとりとしてゐると、「ぼうん」といふ釣鐘の音が一つ聞えた。彼は、「おや、初夜が鳴る。」というて、なほ柿をむき續けてゐる。





東大寺 奈良市の東北。華嚴宗の大本山。聖武天皇の創建。

余には、この「初夜」といふ言葉が、非常に珍しく面白かつたのである。「あれはどこの鐘か。」と聞くと、「東大寺の大釣鐘の初夜です。」といふ。「東大寺がこの頭の上にあるか。」と尋ねると、「すぐそこです。」といふ。余が不思議さうにしてゐたので、女は室の外の板間に出て、そこの中障子を明けて見せた。なるほど東大寺は、自分の頭の上に當つてゐるくらゐである。何日の月であつたか、そこらの荒れた木立の上を、寂しさうに照らしてゐる。女中は更に向うを指して、



東大寺（奈良）

根岸　東京市下谷區根岸。子規の住所。

「夜はあそこへ鹿が來て鳴きますから、よく聞えます。」といつた。（子規全集）

○

「只今は失敬いたし候。お歸り後、御たまものを運び來り見せ候ところ、もはやがまんの緒がきれ、どう／＼一つねだり取り申し候。」「これは當地にて蜂屋と申し候やらん、我が鄕里にては祇園坊と申し候。」「凡そ天下に柿多しといへども、この柿にまさるはこれなく候も、根岸に無きため、つひに口に入らず、鄕を出でて二十年、はじめて風味に接し申し候。定めて御持參困難なりしことゝ存じ候。

鄙にては祇園坊といふ都にて
蜂屋ともいふ柿の王はこれ



夏目漱石　名は金之助。東京市の人。文學者。大正五年歿、年五十。

あぢはひを何にたとへん形さへ
濃きくれなゐの玉のごとき柿　（正岡子規）

○

澁柿や古寺多き奈良の町　子規
停車場に柿賣る柿の名所かな
故里や祭も過ぎて柿の味
柿食はぬ病に柿を貰ひけり
柿多き村に出でけり西の京

## 七 噴煙

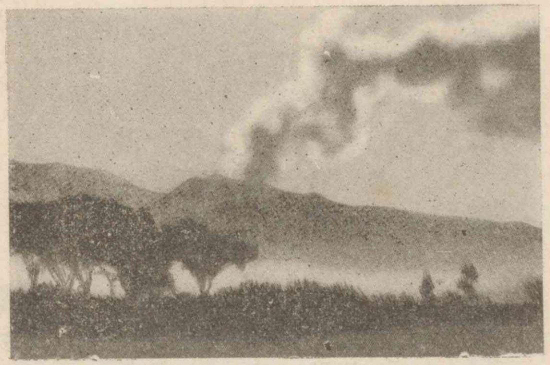
夏目漱石

「あの音は壯烈だな。」

「足の下が、もう搖れて居る樣だ。おい一寸地面へ耳をつ

けて聽いて見給へ。」

「どんなだい。」



阿蘇山遠望

「非常な音だ。慥に足の下が唸つてる。」

「その割に烟が來ないな。」

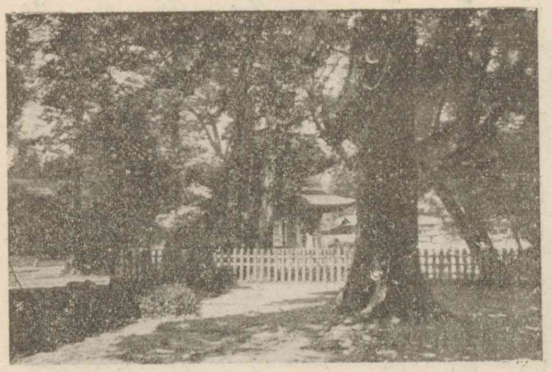
「風の所爲だ。北風だから、右へ吹きつけるんだ。」

「樹が多いから、方角が分らない。もう少し登つたら見當がつくだらう。」

暫くは雜木林の間を行く。道幅は三尺に足らぬ。いくら仲が善くても、並んで歩く譯には行かぬ。圭さんは大きな足を悠々と振つて、先へ行く。碌さんは小さな體をすぼめて小股に後からついて行く。ついて行きながら、圭さんの足跡の大きいのに感心して居る。感心しながら、歩いて行くと、段々後れてしまふ。

路は左右に曲折して爪先上りだから、三十分と立たぬうちに、圭さんの影を見失つた。樹と樹との間をすかして見ても、何も見えぬ。山を下りる人は一人もない。上るものにも全く出會はない。只處々に馬の足跡がある。たまに草鞋の切れが茨にかゝつてゐる。その外に、人の氣色は更にない。饂飩腹の碌さんは少々心細くなつた。

阿蘇の社　阿蘇神社。官幣大社。熊本縣阿蘇郡宮地村に在る。健磐龍命・阿蘇比咩・速瓶玉命等を祀る。



阿蘇神社

昨日の澄切つた空に引換へて、今朝宿を立つ時からの霧模様には少し懸念もあつたが、晴れさへすればと、好い加減な事を賴みにして、とう〳〵阿蘇の社までは漕ぎつけた。白木の宮に禰宜の鳴らす拍手が、森閑と立つ杉の梢に響いた時、見上げる空から、ぽつりと何やら額に落ちた。今朝がた、饂飩を煮る湯氣が障子の破れから吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過は雨かなと思はれた。

雑木林を小半里程來たら、怪しい空がとう〳〵持切れな





くなつたと見えて、梢に滴る雨の音が、さあと北の方へ走る。後から、すぐ新しい音が耳を掠めて、翻る木の葉と共に、又北の方へ走る。碌さんは首を縮めて「ちえつ」と舌打をした。

一時間程で林は盡きる。盡きると云ふよりは、一度に消えると云ふ方が適當であらう。振返ると後は知らず、貫いて來た一筋道の外は、東も西も茫々たる青草が波を打つて、幾段となく連なる奥から、むく〳〵と黒い烟が持上つて來る。噴火口こそ見えないが、烟の出るのはつい鼻の先である。

林が盡きて、青い原を半町と行かぬ所に、大入道の圭さんが空を仰いで立つてゐる。蝙蝠傘は疊んだ儘、帽子さへ被らずに、毬栗頭をぬつくと草から上へ突出して、地形を見廻

してゐる様子だ。
「おうい。少し待つて呉れ。」
「おうい。暴れて來たぞ。暴れて來たぞう。しつかりしろう。」
「しつかりするから、少し待つてくれえ。」と、碌さんは一所懸命に草の中を這ひ上る。漸く追ひつく碌さんを待受けて、
「おい、何を愚圖々々してゐるんだ。」と、圭さんがやつつける。
「だから饂飩ぢや駄目だと云つたんだ。あゝ苦しい。おい、君の顔はどうしたんだ。眞黑だ。」
「さうか。君のも眞黑だ。」
圭さんは無造作に白地の浴衣の片袖で、頭から顔を撫で



よな　火山灰。熊本地方の方言。

まはす。碌さんは腰からハンケチを出す。
「なる程、拭くと着物がどす黑くなる。」
「僕のハンケチもこんなだ。」
「ひどいものだな。」と圭さんは雨の中に坊主頭を曝しながら、空模様を見廻す。
「よなだ。よなが雨に溶けて降つてくるんだ。　そら、その薄の上を見給へ。」と碌さんが指をさす。長い薄の葉は一面に灰を浴びて、濡れながら靡く。
「成程。」
「困つたな、こりや。」
「なあに大丈夫だ。ついそこだもの。　あの烟の出る所を

目當にして行けば、譯は無い。」

「譯は無ささうだが、是ぢや路が分らないぜ。」

「だから、さつきから待つて居たのさ。こゝを左へ行くか、右へ行くかと云ふ、丁度股の所なんだ。」

「成程、兩方とも路になつてるね。併し畑の見當から云ふと、左へ曲る方が好ささうだ。」

「君はさう思ふか。僕は右へ行く積りだ。」

「どうして。」

「どうしてつて、右の方には馬の足跡があるが、左の方には少しもない。」

「さうかい。」と、碌さんは、體を前に曲げながら、蔽ひかゝる草





を押分けて、五六歩左の方へ進んだが、すぐに取つて返して、

「駄目のやうだ。足跡は一つも見當らない。」と云つた。

「無いだらう。」

「そつちにはあるかい。」

「うん、たつた二つある。」

「二つきりかい。」

「さうさ、たつた二つだ。そら其處と此處に。」と圭さんは繻子張の蝙蝠傘の先で、かぶさる薄の下に、幽かに殘る馬の足跡を見せる。

「是だけかい。心細いな。」

「なに大丈夫だ。」

「天佑ぢやないか。君の天佑はあてにならないこと夥しいよ。」

「なに、是が天佑さ。」と圭さんが云ひ了らぬうちに、雨を捲いて颯とおろす一陣の風が、碌さんの麥藁帽を遠慮なく吹込めて、五六間先まで飛ばして行く。眼に餘る青草は、風を受けて一度に向うへ靡いて、見るうちに色が變ると思ふと、又靡き返して故の態に戻る。

「痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える。あれを見給へ。」と、圭さんが幾重となく起伏する青い草の海を指す。

「痛快でもないぜ。帽子が飛んぢまつた。」





「帽子が飛んだ？いゝぢやないか、帽子が飛んだつて取つて來るさ。取つて來てやらうか。」

圭さんは、いきなり自分の帽子の上に蝙蝠傘を重しに置いて、颯と薄の中へ飛込んだ。

「おい、この見當か。」

「もう少し左だ。」

圭さんの體は次第に青い物の中に、深くはまつて行く。仕舞には首だけになつた。あとに殘つた碌さんは又心配になる。

「おうい、大丈夫か。」

「何だあ。」と向うの首から聲が出る。

——阿蘇の噴煙——



「大丈夫かよう。」

やがて圭さんの首が見えなくなつた。

「おうい。」

鼻の先から出る黒烟は、鼠色の圓柱の各部が絶間なく蠕動を起しつゝある如く、むく／＼と捲上つて、半空から大氣の裡に溶けこんで、碌さんの頭の上へ容赦なく雨と共に落ちてくる。碌さんは悄然として首の消えた方角を見詰めて居る。

暫くすると、まるで見當の違つた半町程先に、圭さんの首が忽然と現れた。

「帽子はないぞう。」

「帽子は入らないよう。早く歸つてこうい。」
圭さんは坊主頭を振立てながら、薄の中を泳いで來る。
「おい、何處へ飛ばしたんだい。」
何處だか、相談が纏らないうちに飛ばしちまつたんだ。
帽子はいゝが、歩くのは厭になつたよ。」
「もういやになつたのか。まだ歩かないちやないか。」
「あの烟と、この雨を見ると、何だか物凄くつて、歩く元氣がなくなるね。」
「今から駄々を捏ねちや仕方がない。――壯快ちやないか。あのむく／＼烟の出てくる所は。」
「そのむく／＼が氣味が惡いんだ。」

「冗談云つちやいけない。あの烟の側へ行くんだよ。さうして、あの中を覗き込むんだよ。」
「考へると全く餘計な事だね。」
「兎も角も歩かう。」
「はゝゝ、兎も角もか。君が兎も角もと云ひ出すと、つい釣りこまれるよ。さつきも兎も角もで、とう〳〵饂飩を食つちまつた。」
圭さんは立ちとまつて、黒い烟の方を見る。
濛々と天地を鎖す秋雨を突きぬいて、百里の底から沸き騰る濃いものが渦を捲き、渦を捲いて、幾百噸の量とも知れず立ちあがる。その幾百噸の烟の一分子が、悉く震動して





爆發するかと思はるゝ程の音が、遠い〳〵奥の方から濃いものと共に頭の上へ躍り上つて來る。
雨と風のなかに、毛蟲のやうな眉を攢めて、餘念もなく眺めて居た圭さんが、非常な落着いた調子で、
「雄大だらう、君。」と云つた。
「全く雄大だ。」と碌さんも眞面目で答へた。
「恐ろしい位だ。」暫く時をきつて碌さんが附加へた言葉はこれである。
圭さんはのつそりと踵を廻らした。碌さんは默然としてついて行く。空にあるものは烟と雨と風と雲である。地にあるものは、青い薄と女郎花と、處々にわびしく交る枯

小笠原長生　子爵。宮中顧問官。海軍中將。
ルーズヴェルト　西暦一八五九—一九一九。
ニューヨーク　北米合衆國最大の都會、大西洋岸ハドソン河口に位する。
八月十三日　明治四十四年。

梗のみである。

二人は煢々として無人の境を行く。（漱石全集）

## 八　東西兩雄の意氣投合

小笠原長生

米國前大統領ルーズヴェルトの屋敷は、ニューヨークより二十餘里を隔てたオイスター灣サガモア丘の森の中に建てられた簡素な木造である。さうして玄關を入れば右は書齋、左は應接室で、少しの裝飾もないが、彼が大統領であつた時代には、各國大公使の國書捧呈をこゝで受けたといふ尊い由來つきの室である。

東郷大將が同邸を訪問したのは八月十三日で、午前十一時四十五分マンハッタンのペンシルヴァニヤ驛より臨時列車に投じ、午後零時四十分オイスター灣に着き、同所に待つてゐたウッドフォード少將の自動車でサガモア丘に向つた。

マンハッタン　ハドソン河口の一島。ニューヨーク市の一部。

東郷元帥

これより先、その通知を受けてゐたルーズヴェルトは、滿身に溢るゝ喜悦を以て、夫人と共に、質素で而も眞情の籠つた歡迎準備をなし、今か今かと大將の到着を待焦れて、遂には玄關に立出で、廣い車寄を彼方此方と逍遙してゐた。そこへ大將が着いたのだからたまらない、感情を制して體裁を作るなどの小細工を超越した親みに

コロニヤルホール　Colonial hall.　植民記念室。

浸つてゐる快傑は、大將がおり立つと同時に駈けよつて、
「おゝ親愛なる東郷君、よく來てくれた。本當によく來てくれた。余はどんなに待つたらう。」
さうして懷かしくてたまらぬ樣子で、頑丈な左右の手をぬつとさし延べ、同じく雙手を出した大將の手をうんと握つて打振り打振り「嬉しい、嬉しい。」と繰返しつゝ、抱へるやうにして廣いコロニヤルホールに案内した。

ルーズヴェルト

そこで大將は改めて初對面の挨拶をなし、土產として本



クリスマス　Christmas.　耶蘇降誕祭。十二月二十五日。

邦より携へて來た金銀細工の鎧の飾物を箱のまゝ贈呈した。するとルーズヴェルトは、恰も小兒がクリスマスの贈物の包をあける時のやうな熱を以て箱をあけ、鎧を取出すや、「おゝ、綺麗。」と叫んで、飽かず見入り、大將よりその說明を聞くと、例の「嬉しい、嬉しい。」を連發し、すぐにそれを飾棚に置き、再び大將の腕を抱へ込んで應接室に導き、夫人に紹介した。

斯くて大將一行は、主人夫妻の心を籠めた午餐の饗應に與り、食事が終ると、主客共に打寬いで、それからそれへと樂しげに笑ひ興じ、或は戰爭談に、或は名勝談に、いつ果つべしとも見えなかつた。と、ルーズヴェルトは立上つて、一口（ふり）の太刀を捧げつゝ座に戻り、容を正して大將に向ひ、

「これは貴國の天皇陛下より贈られたもので、余が第一の家寶であるからお目に掛ける。」

と恭しく手渡しした。

小笠原長生

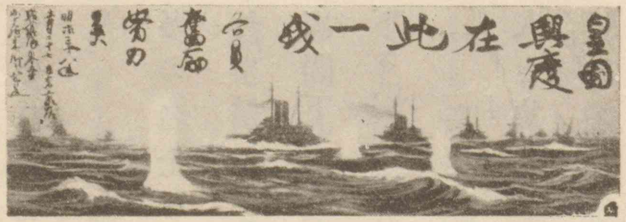
一體ルーズヴェルトが、壯年時代より深く明治天皇を尊崇し奉つてゐたのは著名なことで、御治績を始め、大帝に關し奉る事は細大となく知悉してゐて、眞に世界第一の偉人におはすと、甚深の敬意を捧げてゐたのである。從つて此の太刀をも、彼は決して物質視しないで、それから偉大な教訓を感受してをる樣子であつた。

さて、固より謹嚴な大將は、兩手に之を受けて押戴き、引拔いてじつと見入ると、錵細かに匂深く、處々に稻妻閃いて、地鐵青く澄み、天晴の業物と見受けられたが、油が凝結してゐる箇處があつたので、その旨を主人に語り、「私が手入して進ぜよう。」と、附けて贈られた打粉をうち、拭をかけて油をひき直し、靜かに鞘に收めて返上した上、懇切にその保存法を傳授した。すると、ルーズヴェルトは、「多謝、多謝。」と繰返して、深くその好意を謝し、續いて日本に於ける武士道と刀劍との關係について種々質問し、大將はこれに應じて、その歷史の大要を語つた。

此の時通譯として大將に隨行してゐた水野總領事は、その後或人に兩雄の會談についてこんな話をした。

水野總領事　名は幸吉。大正三年歿、年四十二。

「午餐前に、ルーズヴェルトは、その書齋の壁に懸けてある色色の記念物について大將に説明したが、食後暫く席を離れた際、夫人は大將に向ひ、同じく壁間に掲げてある小旗を指し、ほゝゑみながら、『ルーズヴェルトはこの旗について何か申し上げましたか。』と問ひかけた。大將は、『いや何も承りませんが、何か由緒が御座いますか。』と反問した。と、夫人はつゝましやかに、『實はこの旗はルーズヴェルトが初陣の時、敵から奪つた大隊旗なので、何時も得意になつてお客様にお話するので御座いますが、大方閣下の御功績があまりに大きいので、恥かしくて申し上げられないので御座いませう。』と答へた。大將は頭を打振り、『いや、さやうな道理は御座いません。私の微功も閣下の御勳功も、時と處とこそ違へ、國家に盡くす覺悟は一つで、責任と配慮とに何の差異がありませう。』というてゐる所へ、ルーズヴェルトが戻つて來て、この問答を聞き知ると、夫人に向つて、『御身は言はでもの事をお話したものだ。閣下の大功に對して恥かしい極みだ。』と、少女の樣に顏赤らめながら、改めて大將と熱烈な握手を交した。その光景は實に床しい極みであつた。又この會合の際の、箇にして含蓄ある大將の言葉を、その



日本海海戰の圖と東郷元帥の贊

通り通譯するには頗る苦心した。」
かれこれする中、午後三時となつたので、盡きせぬ名殘を惜しみつゝも大將は、主人夫妻に別れを告げた。
「おゝもう戻られるか、余がこの邸は、既往幾多の名士を迎へたが、未だ閣下のやうな榮譽ある人を迎へた事がない。恐らくは將來に於てもさうであらう。さらば閣下よ、益、御健勝で、國家並びに人道のため全力をお盡し下さい。」
夫人は雙眼に涙を湛へて、握手を交し、
「今日はようおいで下さいました。私は主人と共に永久に今日を記念し、毎日お贈物を見、閣下にお目にかゝつたつもりでお懷かしみ申し、御健康を祈りませう。くれ〴〵も





御機嫌よういらせられませ。」
流石沈着な大將も、この誠意の籠つた別辭には深い感動を受けたものか、微かに顫ひを帶びた音聲で、重ねて慇懃に別れを告げ、自動車に乘つて邸を辭した。折しも涼風颯と吹來つて、殘暑の苦熱を何處へやら拂ひ去つてしまつた。
それから間もなく、大將は合衆國を辭して、丹波丸に乘船し、同國艦隊司令官の指揮の下に、二隻の巡洋艦に灣外まで送られて、歸朝の途に就いた。
今年の春であつたか、東郷元帥と對談の折、ふとした話の序から、ルーズヴェルトの事に及んだ。すると元帥は、
「彼がゐたらなあ。」

新渡戸稻造 岩手縣の人。農學博士。法學博士。昭和八年十月カナダの病院に逝く。年七十二。

と、さも感慨深げに歎息せられた。まことに同感だ。意氣投合といつても、この兩雄のやうなのは稀であらう。兩者共に信仰の英雄であつて、同時に又至誠の勇士である。

東郷元帥曰く、

「天は正義に與し、神は至誠に感ず。」

ルーズヴェルト曰く、

「神を畏れよ、而して汝の義務を盡せ。」（鐵櫻漫談）

# 九 人物試驗

新渡戸稻造

人生は生れてから死ぬまで一種の試驗であるとは、何人も普通に云ふことであるが、毎日此の試驗地獄を歩みつゝ



ストックホルム 瑞典の首府。バルチック海岸メーラル湖畔にある。

ある我々は、とかくこの事を忘れて、恰も及第生の如き得意顔で油斷する。

最早六十歳にもなれば、及落はとくに定まり、落第したものは落第者として取扱はれ、再試驗の必要はないと氣が弛むが、自分は僅かに昨年の春、測らぬ時に測らぬ處で試驗を受け、而して稍、落第點に近い成績を得た。

新渡戸稻造

瑞典のストックホルムに行つた時、時の內閣の某大臣の官邸で午餐に招かれた。二十四五人ばかりの相客を國別

すれば、四五箇國の外國人が混つて居り、日本の公使も列席してゐた。

食卓は種々な花卉を始め、各種の燒物で飾られてゐた。一體この國の名産は硝子製品で、美事な硝子の花瓶・人形・コップ等が食卓に列べてあつた。自分の前にあつた人形は特に美しく見えたが、近眼の情なさは、十分にその美を鑑賞することが出來かねたので、手を延ばして取上げ、目近くこれを眺めて、再びもとの場所に据ゑようとした刹那、丁度自分の前にあつた葡萄酒のコップに、一寸手が觸れた。自分は何の氣もなく件の人形を置いて、平然として、左の方にゐた主人と談話をつゞけてゐた。少時して、給仕が酒をつぎ





に來た時、自分のコップを取りのけて、更に新しいコップを持つて來たのを見て、始めて自分の粗相したことを知り、主人に對してその失禮を謝した。勿論主人は之を一笑に附して、話はそれで終つたのである。

食卓を去つて別室でコーヒーを飲んでゐた時、客の一人が自分に近づいて云ふ「曾て貴下の著述『武士道』といふ書を拜見して、喜怒哀樂色に現はさぬのがその教訓の一であることを承知してゐる。それで、先刻あの晴れの場所で、而も貴重品として取扱はれてゐるこの官邸のコップを貴下が毀された時、私はたゞぢいつと貴下の顏色を見てゐたが、貴下は更に頓着なく、何事も起らなかつたやうな樣子をされ

てゐた。流石は鍛錬を積まれたものだと、深く敬服した。」と。之を聞いて自分は驚いた。喜怒哀樂を色に現はさぬどころでなく、實は甚だ赤面したのである。まして近眼の爲に氣が附かなかつたものを、鍛錬の結果の如く解釋されるに至つては、たゞ〳〵恐縮するの外なかつた。

併し何事によらず、總べて斯くの如きものではなからうか。人の性質を批評し判斷するには、その人の油斷してゐる時、世人と沒交渉である時、或は測らざる出來事が起つた時を以て最も適當とする。かくの如き場合には、事柄そのものは小であつても、人の性質が能く現はれる。自分も長い間諸國の人々に交はり、各種の國民性を研究しようと心懸けたが、その材料もやはり斯くの如き些細な、當人が殆ど自覺してゐない時の態度か、或は突然起つた出來事に對する彼等の行爲か、或は卽座に發する一言や聲音等によるのであつて、之によつてその人々の値打が分るのである。

（東西相觸れて）

## 一〇　曾呂利新左衛門

湯淺常山

堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何と申すぞ。」と問ひけるに、その者の對ふるやう、「臣が姓名は卽ち曾呂利新左衛門と申し候。」太閤「扨は奇なる姓もあるものかな。して其の曾呂利と申す姓には、何ぞ謂はれにてもありつるものか。」と問はせけるに、又對ふるやう、「聊か謂はれこ

湯淺常山　名は元禎、岡山藩士。儒學者。天明元年（二四四一）歿、年七十四。
堺　今の大阪府（和泉）堺市。
太閤　豐臣秀吉。

殿下　昔は攝政・關白にも殿下といふ敬稱を用ひた。

れあり候。別にあらず、臣の拵へたる鞘は堅くして、そろりと入り、敢へてつかへず。是を以て曾呂利と申し候。」太閤「こは奇なり。又、折節來らるべし。」と。

豐太閤

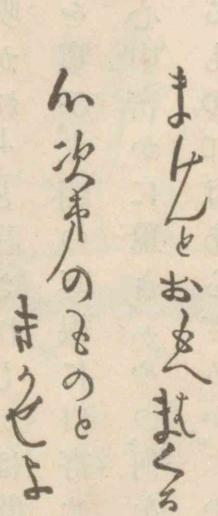
他日、又太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、「汝の姓名は何とか申しし。」對へて曰く、「曾呂利、曾呂利、新左衛門、新左衛門。」太閤怪しみて其の重言を尋ねけるに、新左衛門の對ふるやう、「殿下先に臣の姓名を問ひ、今又重ねて問ひ給ふ。故に臣も亦殿下重問の意に從ひ、同じく重言を以て對へ候ふなり。」と。





新左衛門、或時太閤に向ひ、「願はくは一日御耳の匂を嗅がせられたし。」とありければ、太閤はいぶかしく思ひ、「こやつ、又何をか爲すらん。」と疑ひしが、「何はともあれ、宜し、汝がよきに嗅がれよ。」と許されしかば、諸大名の御機嫌伺ひに出づる時を窺ひ、太閤の耳根に口寄せて何やら言ふの體なれば、皆々心中密かに驚き、「かやつ、何を言ふらん、若しや我を讒言するものにはあらざるか。　かやつは頗る殿下の寵愛する所なれば、かやつが言ふ事御用ひあらんも亦測られず。」と憂ひ、各、わが邸に歸りて、早々數多の金銀財寶を調へて、密かに曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山の如く集ひければ、太閤の御前に出で、謝して言へるやう、「殿下一日の

豐太閤筆蹟
一かたんと思へばかつまけんと思へばまくる心次第のものときかせよ



豐太閤筆蹟

御耳を拜借し、其のかうばしき匂を嗅ぎたる功能によりて、金銀財寶山の如く集ひ來りて、殆ど坐するの餘席これ無く候。これ全く殿下の御耳の功能なり。」とありければ、太閤も亦呆然として驚きけりとなん。

又或日の事なりしが、新左衞門太閤の機嫌を取り、頗る其の功ありける程に、太閤の申しけるは「何なりと汝の望むものを取らせん。」とありけるに、新左衞門の言へるやう「臣敢へて大いなる望もこれなく候。唯、紙袋二つ程米を賜はりたし。」太閤「そはいと〳〵易





きこととなり。餘り寡欲の至ならずや。」と仰ありけるに、新左衞門「これにて澤山なり。」と申して退出なししが、やがて二つの紙袋を張拔き、數十百人を雇ひ來りて、太閤の御前に出で、「前日御約束の米これに賜はりたし。」とて米倉二戸前を蓋うたりけるにぞ、さすがの太閤もこれには呆れて、少時言葉もなかりけりとぞ。

又或日の事なりしが、嘗て太閤數多金銀の蟹を鑄造らせ、之を庭の泉水、或はその近邊に放ちて娯樂となしけるが、程經て、見厭きたりとて、近習の者に「何ぞ一用を言出づる者には之を與へん。」と申されけるにぞ、皆々大いに喜び、「臣は之を紙押になさん。」と言ひ、或は「臣は金の茶釜の蓋もなければ、せ

**常山紀談**　二十五卷。湯淺常山著。武家に關する逸話等を記したもの。

**沼波瓊音**　名は武夫。愛知縣の人。國文學者。第一高等學校教授であつた。昭和二年歿、年五十一。

めてはこれを以て其の蓋の取手(つまみ)になさん。」と言ひ、或は何と言ひかと言ひて各一つづつ賜はりしうち、新左衛門の乞ふやう、「臣は人間の角力も既に見厭きしことなれば、この蟹を集めて角力を致させんと存ずるなり。」と言ひければ、太閤「角力とありては五箇や十箇にては其の興薄かるべし、悉く持行くべし。」と、殘れる蟹を皆新左衛門に與へけりとなん。其の頓才實に驚くべし。（常山紀談）

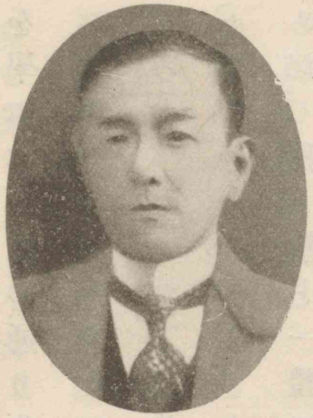
## 一一　會得

沼波瓊音

高等學校に居た頃、少しばかりは柔術を稽古した。或日僕は某と云ふ黒帶の先生と組んだ。習つた術をいろ〳〵



應用して居る內、僕はドタンと仰向に倒された。起上らうとする途端、先生は僕の右手を抱へ込み、仰向になつて、僕の胸の上へ斜に乘つてしまつた。先生は肥つた人であるが、



沼波瓊音

體は綿のやうに輕い。輕いけれども、どうしても押除けることが出來ぬ。足で疊を蹴つて起きようとしてもだめだ。焦慮(あせ)つて體を動かすと、先生の體も從つて動く。二人の體はX字形をなした儘で、ぐる〳〵疊の上を廻るばかりである。

やがて先生は體を外して、自分が下になり、僕をして先生

がやつたやうに上に乘らせて「斯う壓へられた時には斯うすれば起きられる。」と云ひ樣、ぐるりと起きると、忽ち僕が下になつた。これから此の起きる法を學ぶべく、前の通り先生に壓へられ、先生のやつたやうに起きようと試みた。「だめだ。」と先生は大喝した。「自分ばかり起きようとするからだめだ。我と敵と一體になつて起きれば譯はない。」僕は汗を流して屢、試みるうち、熟練したのか、疲れた爲か、全く我を忘れて、夢の如く起上る。「さうだ。」と先生が言つ

柔道の押へ込み



身を棄てゝ山河の末に流るゝとちがらもみをすてゝこそ浮ぶ瀬もあれ(空也上人)

た時、我に歸ると、僕は先生の大きな體の上になつて居たのである。『身を棄てゝこそ浮ぶ瀬もあれ。』といふことはこゝです。今の心持を忘れちやいけませんよ。」と先生が言つた。

其の後屢、試みたが、實に譯なく起きられる。今は其の術の名なんか忘れてしまつたが、起上る時の氣持はよく覺えて居る。其の時に僕は其の術を會得したと共に、會得といふことの意味をも始めて會得した。「我と敵と一體になる。」「身を棄てゝこそ浮ぶ瀬もあれ。」こんな話を何度聞いたつて、何度讀んだつて、起上ることは出來ぬものだ。自ら敵と一體になり得、自ら身を棄て得た —— その時は殆ど偶然の如く爲し得るが常である —— その刹那に、この語を味つて、

はつと思ふと、偶然爲し得た際の心の情態、體の情態が、正確に明晰に意識され、其の意識は大磐石の如く胸に凝つて、永久小動ぎもしない。會得したといふのはこの情態を云ふのである。文字に依つてのみ事を知らんとする輩は、前記の語を諳記して敵を組み伏せようとする者ではあるまいか。(小理小情)

## 一二 氣合

鶴見祐輔

誰でも一高の寄宿寮の生活をした人は、ある懷かしみをもつて往年を振返つて見るに違ひない。あわたゞしい學生時代のうちで、一高の生活だけが、ある懷かしい思出を私

鶴見祐輔 群馬縣の人。思想家。政治家。



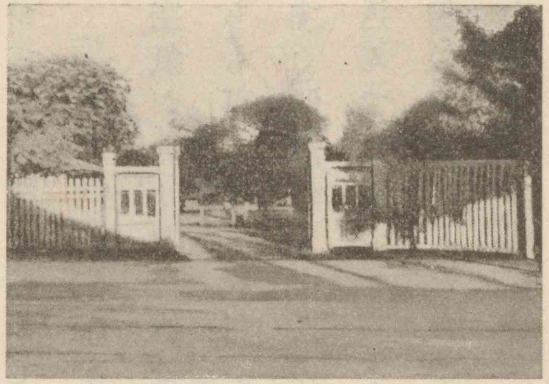


たちの胸の中に殘す。その香の如き感じを我々は一生持つて歩いてゐるのである。

一高といふところは、元來が武骨自慢のところへ、時代の空氣がさうした傳統主義、英雄主義の頃であつたから、私たちも可なりそれにかぶれて居つた。殊に私は入學するとすぐ、偶然にも、文人の群に入らないで、武人の群にころがり込んでしまつた。それは岡山中學の終ごろ、少しばかり擊劍の稽古をしたのが緣で、一高の擊劍部に入つてしまつたためである。

當時私は岡山の田舍にゐて、一高といふものと一高生といふものに、ひどくあこがれてゐた。その理由は、一高が天

下の秀才をあつめた處だと思つてゐたのと、今一つは一高が當時野球で天下に覇を唱へてゐたためである。であるから一高生になれば、その二つの後光がさすかのやうに考へてゐた。從つて入學するとすぐ野球グランドに行つて、大學帽をかぶつた先輩の指導の下に練習してゐる一高選手を、崇拜の情に胸を躍らせながら見たものである。



第一高等學校

しかし一高の撃劍部といふものは、そんなに偉いものとは思つて居なかつた。ところが先輩から呼出されて、諄々と一高撃劍部の光榮ある歴吏なるものを説いて聞かされ、その傳統を擔つてゆくものは君たちであると油をかけられたので、少々面喰つた。

私は岡山の中學では撃劍はやらなかつた。たゞ一緒にゐた友達が大名の子で、昔の家來が來ては撃劍の御指南をするものだから、私も腹ごなしに少しばかり頭を叩いて貰つただけである。それが今選まれて、光榮ある一高十四年の歴史とやらをかついでゆく事になつたのであるから、有難いよりは面喰つたわけだ。

それから先輩が私たちを引率して、各學校の撃劍大會に試合につれ廻つた。ところが私は何處へ行つても負けた。

何しろ負けるわけであつた。中學の折たしか一遍しか試合といふものをした事がない位の程度で、本當に弱かつたのだから。

苟くも一高の選手として出たものが、かう負け續けては申譯がないと思つて口惜しかつた。

重い道具を擔いで、とぼ〳〵と本郷の一高の寄宿寮へ歸つて來た。五人行つた中で負けたのは私一人であつた。秋の小雨の降る日で陰氣な空模樣であつた。日曜日のガランとした食堂で、私は一人淋しく夕食をすまして、うすら寒い南寮十番の部屋に歸つて來た。とつぷり暮れた戸外には、雨脚がしとゞ繁くなつた。窓のところに獨り立つてゐるうちに、「これで三度つゞけて負けたんだ。」といふ囁きが頭の底の方で聞えた。すると涙がほろ〳〵と頰をつたつて流れて來た。部屋には他に誰も居なかつた。私はだまつて机に向つて考へ出した。「なぜ負けたんだらう。」さう思つてぢつと考へて見た。そのうちに、ふと何か私の頭のうちを過ぎたやうな氣がした。「技が下手で負けたんぢやない。」さういふ考がきらりと一閃した。それは私が今日竹刀を執つて立上つて相手と顏を見合せた瞬間、ふと怖いといふ氣がしたのを思ひ出したのだ。「氣合負けがしたんだ。」私は豁然として頓悟したやうに感じた。

その晩はまんじりともしなかつた。年とつた人には笑

はれるかも知れない。しかし若い人には解るであらう。感激的な十八歳の青年であつた私の眼からは、涙が後から後から流れて枕に落ちた。負ける事の嫌ひな私は、口惜しくて眠れなかつたのである。「どうしてもこの次からは勝たなければならない。」私はさう思つて一夜まんじりともせず床上に輾轉した。

それから私は机の前に、「氣合」といふ字を貼りつけて、一所懸命に工夫した。撃劍の技よりは、敵を呑む氣合だと思つたのである。さうして一年間修業した。その翌年は、私は幸にして對外試合では一度も負けなかつた。しかし三年になつた時分には、また撃劍をなまけ出した。この時分は





入學の翌年　明治三十七年。

私は演説に凝つてゐたのである。

それは入學の翌年の二月に日露戰爭が始まつて、一高で全寮茶話會といふものがあつた。大きい部屋で夜の八時頃から、餘興やら演説やらが曉方まで續くのである。その折の野次の猛烈さといふものは、一高に居た人はみんな一生忘れまい。一年生の悲しさ、私は何も知らずに、三年生の委員に勸められて、この壇に上つたのである。ところが後の方の暗がりに陣取つてゐた柔道部や端艇部の連中に散々に野次られて、自分ながら何を言

鶴見祐輔の壇上

つてゐるのか分らなくなつてしまつた。全くあがつてしまつたのである。今でも私はあの晩の事をよく思ひ出す。野次つた方の人はみんな忘れてゐるであらうが、野次られた方の私は一生忘れられない。その晩もとう〳〵口惜しさにまんじりともしなかつた。矢張氣合負けがしたといふ事に氣が付いたからである。

それから私は劍道と演說とは同じものだといふことに氣が附いた。どちらも技は末だ、要するに氣合のものだ、と悟つたのである。丁度劍道で、立上つて、さつと竹刀を合はした瞬間に勝つか敗けるかを直感するやうに、演說も演壇に上つて、ずつと聽衆を見渡した刹那に、うまくゆくかどう





かが解る。それは相手との氣合である。さう悟つた。

それからは、一所懸命になつて演說の稽古をはじめた。どんな野次が出ても、あがらないやうに修行しなければ駄目だと思つたのである。その修行の方法は、私の同室の友人も氣が附かなかつたであらうが、私は年が年中町をあるく時でも、校庭に出てゐる時でも、寢室に居る時でも、敎室から次の敎室へあるいて行く間にでも、口の中でぶつ〳〵演說ばかりしてゐたのであつた。どんな場面に臨んでもしやべれるやうにするには、第一に言葉が泉の湧くやうに後から後から流れ出る癖がついてゐなくては駄目だと考へたので、朝から晩まで口の中でしやべり續けてゐた。私は

無聲堂　第一高等學校の擊劍道場の名。

かうした修行をたしか二年ぐらゐ續けてゐたであらう。その後いつの間にかやめてしまつたが、惜しいことをしたと思ふ。

かうして二十年經つた今日、ふりかへつて當時を想ひめぐらす時、私は教室以外の收穫の案外多かつたことに驚く。第一に私は當時得た友人たちを、人生の最も大切なる收穫として感謝する。その次に私は擊劍を學んだ無聲堂と、演說の練習をした第二大教場とを思ひ出す。この劍と辯との修業が、私に氣合といふものを教へてくれた。この氣合といふものは道場と壇上とのみならず、一切の生活において大切なものだといふことを私は沁々感じる。殊に外國などを旅行して、言語人情の異る人に出會ふ時、自分と相手との關係をぴたりと定めるものは、この氣合である。東洋では「靈犀一點相通ず」と言ひ、西洋人は「靈對靈」と言つた。もとよりかゝる境地の悟入は、劍と辯とに限つたことではない。しかし私は一高時代に劍道で敗れ、壇上で立往生したお蔭で、どうやら少しばかり氣合といふものの心持を考へるやうになつたのだ。

靈犀一點相通ず　唐の李商隱の無題詩に「身ハ綵鳳雙飛ノ翼無キモ、心ハ靈犀一點ノ通ズル有リ。」とある。

春になつて寮の記念祭が近くなると、私はいつも一高時代を思ひ出し、一高を思ふたびに、敗れて眠られざりし若き日を懷ふ。（中道を步む心）

依田學海　漢學者。名は朝宗。學海はその號。舊佐倉藩士。明治四十二年歿、年七十七。

塚原卜傳　劍客。茨城縣（常陸）塚原の人。元龜三年(二二三二)歿、年八十三。

## 無手勝流

依田學海

塚原卜傳、嘗て近江を過ぎ、湖舟に上る。六七の客中、一士人有るを見る。狀貌獰惡にて、鬚髯面を繞る。自ら謂ふ「武伎に精しく、天下敵無し。」と。卜傳膝を抱きて坐睡し、聽かざる者の如し。士睥睨して曰く、「吾子も亦刀を佩ぶ。何ぞ一言せざる。」と。卜傳徐ろに曰く、「僕の伎は君と異なり。人に勝つを求めず、敗れざらんと欲するのみ。」と。士、色を作して曰く、「子の術は何と名づくるか。」と。曰く、「無手勝流是なり。」と。曰く「佩ぶる所は何の用ぞ。」と。曰く、「是、私心を斷つ、人を斬るに非ざるなり。」と。士益、怒りて曰く、「子、徒手我に敵するや。」と。曰く、「可なり。」と。士、舟人を呼びて岸に上らんとす。卜傳遙かに一洲を指して曰く、「岸上に格鬪せば、或は人を傷つけん。請ふ彼に於てせん。」と。乃ち舟に命じて洲に近づかしむ。士躍り起ちて陸に上り、劍を拔き、麾いて曰く、「客來れ。客來れ。」と。卜傳、刀を脫し、之を舟人に付し、其の棹を奪ひて一盪す。舟開きて岸を去ること數丈なり。大いに笑ひて曰く、「無手勝流とは是なり。」と。

北原白秋　名は隆吉。福岡縣の人。詩人。歌人。

葛飾　東京府南葛飾郡小岩村。今は東京市江戸川區小岩町といふ。

## 一三　雀

北原白秋

嘗て葛飾にゐた時、雀のお宿の私の草舍に、恐ろしい闖入者が來た事があります。冬の事でした。庭の枯木の百日紅に、その日も雀が鈴なりになつてゐました。こぼれ〳〵してゐました。その雀どもを、何心なく寒々と眺めてゐる

と、私は、はつと吐息をつきました。向うの破れ垣の間から、圓い小さな筒口のやうなものが、そろり／＼と出て來るのです。鐵砲でした。雀は何にも知らずに遊んでゐるのです。私は蒼くなつて立上ると、

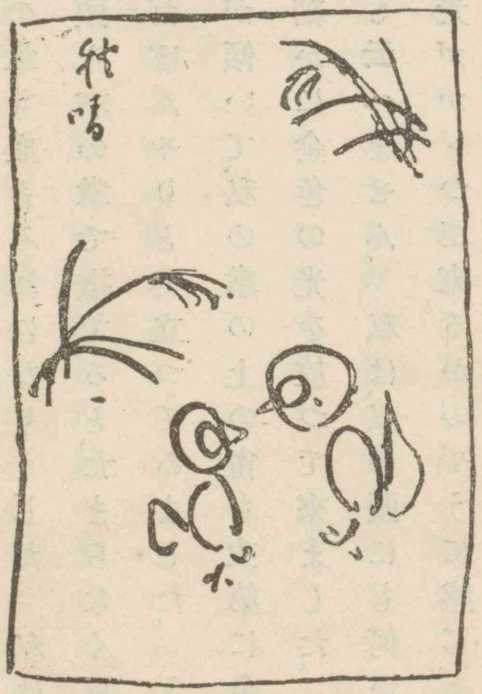
「いけない／＼、雀を射つては。」

思はず聲をあげる、その拍子に、づどんと響くと、白い煙がぱつとあがりました。それより迅く、一齊に雀は飛立つたが、その中の一羽が、ばた／＼と落ちて來ました。私は跣足で飛下りると、もう激しい憤怒と憐愍とで胸がいつぱいになつたのです。何といふ無法な人間か、その男は。處も有らうに、他の庭木の雀に向つて發砲したのです。さうして、





而も巧みに射落したのです。雀どころか、私は全く自分の心臟をも撃ち貫かれたやうに感じました。



（「雀の生活」所載）

私が飛んでゆくと、垣根の向うでは、かさ／＼と驚いて逃げて行く荒い足音がしました。が、もう濟んで了つてゐるのです。追つかけたつてどうなります。私は枯れた芝草の上に轉げ落ちてゐる雀を、思はず手に取上げると、可哀相なものです、白

ホワイトシヤツ　White shirt.

いホワイトシヤツの雀は血まみれになつて、かはいゝ茶色の頭もがくりと俯向けてゐます。掌を開いて載せると、私の掌も血まみれになりました。私はその圓い溫かな坊主頭を右の掌で撫でると、たまらなく寂しくなつて、暫時はただぼんやりと突立つてゐました。と、枯木には次第に入日が傾いて、私の掌の上の雀も次第に金色になると、私の掌も細かに金色の光を放つて來ました。その靜かな事は何とも云へません。私は、私の頭にも何かしら圓い輪のやうな光がかゝつて來るかのやうに感じました。深甚な悲みは人をも雀をも金色にして了ひます。「成佛してくれ。」私は頭を下げました。今度はいゝ世界に生れて來るやうに、私は靜かに雀を戴きました。さうして何だか私の靈までが、はた〳〵と羽ばたいて、天へ歸つてゆくやうな氣がしました。「ちゆつちゆ。」ふと氣がつくと、私は「ちゆつちゆ」と雀の聲をしながら、その雀の頭をまた輕く撫でてゐたのでした。（中略）

さういふ雀がです。

雪の枯木の小枝に、或朝一列にとまつて、一つ一つかはいい聲をあげて、何だかかはいらしい話をしてゐました。てんでに言（もの）を云つて。

三崎の見桃寺にゐた時の事です。前の晩には雪がしん

三崎　神奈川縣三浦郡にある町。

曹洞宗　禪宗の一、僧道元が創めた。

しんと降り積つてゐました。夜ふけになど、曹洞宗のその小庵はいよ〳〵落ちついて、全く佛といふものの息づかひまでが聞えさうに思はれました。あり難さの限りでした。さら〳〵と庭の木の葉につもる雪の聲もしました。さぞあの木も寒いだらうと思ふと、掌を合せましたが、目が覺めて見ると、空は青く晴れて、冬青の木が一本、白い粉雪を沁々とゆすり落してゐました。椎の木もまた同じやうに沁々とゆすり落してゐました。そして枯木には、雀があの通りでした。かう〳〵しい、いゝ朝明けでした。雀達は何を話してゐたのか、今にもわかりません。が、あの位かはいゝ雀を見たのは初めてでした。思ひ出しても涙が流れさうです。私はその雀のお蔭で、初めて人間の世の安けさをも、美しさをも知る事ができました。本當の幸福といふものも。

（雀の生活）

## 一四　感謝

野口米次郎

野口米次郎　愛知縣の人。詩人。慶應義塾大學教授。

私は終日野原や林の中を駈けまはる
あゝ私の心は空吹く風の心であつた
あゝ雲に歌ふ小鳥の心は私の心であつた
風の心は夕日の影で靜まり
小鳥の心は星の光で默る
私の心も驚いて家のことを思ひだす

そつと家に歸つて
丁寧な言葉で母に言ふ
「遊び過ぎました
どうぞ勘辨して下さい」
食卓の上には私の晩餐が温められ
火鉢にはかつかと炭が燃えてゐる
「お母さんおいしく御飯を頂きました」
かう私は常に似合はぬ感謝をする
それを聞いた母はぢつと眼を閉ぢる





新井白石 名は君美。德川時代の大儒。享保十年(二三八五)歿、年六十九。

寛永寺 天台宗。東叡山と號する。元和元年僧天海の草創。德川家の菩提所。上野公園は其舊境內。

我が父 名は正濟。

何だか母は心の中で泣いて居るやうだ

## 一五 わが幼き頃

新井白石

新井白石

我が幼き頃、上野物語といふ草紙ありき。これは寛永寺の花見に、人の群れ來る事どもを記ししものなり。我が三歳なりし春の頃にや、火燵に足をさしてはらばひ居て、その草紙を見ながら、筆紙をもとめてすきうつしけるを、母にておはせし人の見給ひ、十が中一二はまことの文字もあるを、我が父に見

往來物 日用文を集めた書の稱。

せまゐらせしを、父の友なる人の來り見しより、人々も聞き傳へて、そのうつしものどもをとり傳ふることになりたり。我十六七歳の時、上總國にゆきしに、彼處にてその寫しものを見る事を得たりき。又、その頃、屛風に我が名を題せしに、二字はその體をなしたるものの後までありしが、火に燒け失せたりければ、今は、その頃のものは我が許には遺らず。

この後は、常の戲に、筆とりて物書くことのみ習ひければ、おのづから日々に文字を見識りたれど、物讀む師友とすべき人なかりしかば、たゞ往來物の類などを讀み習ふのみなりき。



戸部 戸部は民部省の唐名。上總久留里侯土屋民部少輔利直。

富田 はじめは小右衞門某といふ、後には覺信といひし人なり。(原註)

太平記評判 太平記中の兵事を批評した書。五十卷。和田榮閣著。

上松 忠兵衞某といふ、駿河今川の家人上松が後にて、連歌などをもこのみて物よく書きし人なり。(原註)

絕句 漢詩の一體。起承轉結の四句より成り五言七言等がある。

戸部の家人に富田とて、生國は加賀國の人と聞えしが、太平記評判といふ書を傳へて、その事を講ずるあり。夜々に我が父など寄りあひつゝ、その事を講ぜしめらる。われ四五歳の時に、毎にその座に侍りて之を聽くに、夜いたく更けぬれど、遂に座を去りし事もなく、講畢りぬれば、その義を請ひ問ふ事などありしを、人々奇特の事なりといひき。

六歳の夏の頃、上松といひし人の、少しく文字などありしが、七言絕句の詩一首教へて、その意を解きかせしに、やがて誦をなしければ、三首まで敎へられしをば、人にも講じきかせたりき。「この兒文才あり、いかにも師を擇びて學ばしめらるべし。」など、彼の人もいひしかど、頑なる昔人達のいひ

上總國 千葉縣君津郡久留里町を指す。土屋侯の領土。

しは、「昔より言ひ傳へし事あり。利根・氣根・黃金の三こんなくしては學匠になり難しといふなり。この兒、利根こそ生れつきたらめ。なほ幼くしてその氣根の事も料り難く、家富めりとも見えねば、黃金の事心得られず。」などいひあへりしに、我が父も、「戸部の御いつくしみによりて、常に側を離れまゐらせず。學に入れ師に從はしめん事もかなふべからず。されど、をさなきより、物書く事をば、戸部も人々に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて、物をば書き習はしめたくこそ侍れ。」とて、我が八歲の秋、戸部の上總國にゆき給ひしあとにて、手習ふ事をしへしめらる。





その冬の十二月半、戸部歸り參り給ひしかば、常に側に侍ふこと、故の如く、明の年の秋、また國にゆき給ひし後にて、課を立てられて、日の中には行草の字三千、夜に入りて一千字を限りて書き出すべしと命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課業は未だ滿たざるに、日暮れんとすること度々にて、西向なる竹緣のある上に、机を持ち出して、業ををへぬることもありき。又夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難きに、我に附けられし者と竊かに謀りて、水二桶づつかの竹緣に汲みおかせて、いたく睡の催しぬれ

水をかぶる白石

庭訓往來　玄慧法印作、漢文めいた十二ヶ月の往復の書簡文。

ば、衣脱ぎ棄てて、先づ一桶の水をかぶりて、衣うち著て習ふに、はじめ冷かなるに目さむる心地すれど、暫し程經ぬれば、身暖かになりて、またねむくなりぬれば、水をかぶること前の如くす。二たび水をかぶりぬる程には、大やうに課をも滿てたりき。これ我が九歳の秋冬の間の事なり。

かゝりし程に、この頃よりは、我が父の人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたり。十一歳の秋、また課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の中に淨寫してまゐらすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、册になして戸部に見せまゐらす。ほめ給ふこと大方ならず。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふ程の文ども、大方は我に命ぜられき。



十六になりし者　神戸といひしものの二男なり。（原註）

また、十一歳の時に、我が父の友に關といひし人の子どもは、太刀打の業にすぐれて人に教ふることありしを、我にもこの業教へられん事を望みしに、「わぬしいまだ幼し、此等の業學ばんこと遲からず。」といふ。「さこそ侍るべけれど、太刀使ふこと少しも心得ざらんには、刀・脇差、腰にせんも誠に不用の事にや。」といひしかば、「のたまふ所誠にしかなり。」とて、一つの業を傳へて習はしめたり。かゝりし程に、その歳十六になりし者の、我と藝を試みんといひしかば、木刀をとりて、三度あひて、三度まで勝つ事を得たりしにぞ、人々も亦興に入りて笑ひたりける。その後は、常にかゝる武藝の事ども

若侍　長谷川といふものなり。（原註）
翁問答　中江藤樹著。歷史・文學等の雜事を記す。
京の人　江馬益庵をいふ、名は玄牧。（原註）
小學　六卷。支那古來の嘉言善行を輯めてある。
程子の四箴　宋の程頤の視聽言動の四箴。

を好みしかど、物讀む事をも好みければ、常に我が國の物語・草紙等の類をば、見ずといふものもなかりき。

十七歳の時に至りて、同じやうに召し使はれし若侍の許に行きしに、案の上に書あるを見れば、翁問答と題せしものなり。如何なる事をか記しぬらんと思ひて、借る事を得て、家に携へ歸りて見けるにこそ、始めて聖人の道といふものある事をば知りけれ。　これより道に志切なりけれど、師とすべき人もあらず。京の人にて醫を業とし少し學問あるが、戸部の許に日々來れるあり。この人に向ひて志の程を語りしに、小學の題辭を講じきかせられたり。その後、又、程子の四箴をも講じきかせられしより、やがて、小學の書を日夜に誦し習ひて、業既に畢りぬれば、四書を誦し習ひ、その後また、五經をも誦し習ひたれど、此等皆々句讀を授けし師あるにもあらず、自ら韻會・字彙等の書によりて誦し習ひければ、後に思ふに僻事のみぞ多かりける。（折焚柴の記）

四書　大學・中庸・論語・孟子。
五經　易經・書經・詩經・春秋・禮記。
韻會　韻に關する字書。元の熊忠撰。
字彙　畫引字書の始。明の梅膺祚撰。
折焚柴の記　白石の自叙傳。三卷。
安積艮齋　名は信。岩代二本松の人。萬延元年（二五二〇）歿、年七十六。
賴宣　德川賴宣。家康の第十子。紀州藩祖。寛文十一年（二三三一）薨、年七十。
五月七日　大阪夏の陣。元和元年（二二七五）。

## 食牛の氣

安積艮齋

元和元年、東照公大阪を征するや、賴宣に旗幕を賜ひて從軍せしむ。　五月七日、賴宣、先鋒兵を接すと聞き、馳せ至れば則ち戰已に終りぬ。　東照公に見えて、泣いて曰く、「兒不幸にして先鋒となるを得ず、故に戰に及ばず。　殊に憾む可きなり」と。　松平正綱側に在り、之を慰めて曰く、「公は妙齡なれば、後來陣に臨むこと必ず多からん。　深く憾むるを須ひず」と。　賴宣怒つて曰く、「あゝ、正綱、

余に再び十四歳の時有りと謂へるか」と。東照公悅んで曰く「今日賴宣をして戰功有らしむとも、此の一語の雄偉たるに如かざるなり」と。列侯座に在りし者、皆感歎して以爲へらく「牛を食ふの氣有り」と。

牛を食ふの氣　尸子に「虎豹の子は未だ文を成さずと雖も已に牛を食ふの氣あり」とある。
阿部次郎　山形縣の人。哲學者。文學博士。東北帝國大學教授。
裏日本　本土の日本海に面する地方の稱。
莊內　山形縣最上川下流地方の平野。

## 一六　吹雪

阿部次郎

私は裏日本も北の果に近い莊內の寒村に生れ、さうしてそこで育つた。嚴冬の吹雪の印象は今でも私の幼時の追憶に伴つて離れようとしない。

靜かな雪は、高いといへば高く、低いといへば低く、上も下





もなくたゞ一面に微光を含んだ灰色の空の中から、限りなくちら〱と降つてくるのが習である。炬燵にあきた子供達は、蓑帽子といふものをかぶつて街道に出て、仰向いて、口を開いて、この降る雪の中に立つ。見上げれば見上げるほど高い虛空の中から、どこから降り始めるともなしに限りなく舞ひ下りてくる雪を仰ぎながら、その雪片のおのづから口腔に落ちて融けるのを興がつてゐる間に、いつしか眉や頰に雪がたまつて、睫さへ閉ざされることを覺える。彼等は

吹雪

この雪を拂ひおとして、傍に立つ友達と相顧みて微笑する――これもまた彼等の遊びの一つである。

しかし吹雪の來る前の空は、低く且墨を含んで黒い。さうしてひつそりした不氣味な靜けさの中から、雪圍に激し雪窓をがたつかせる風が唸りだしてくるのである。それが渦巻をなす大雪を伴つてくるときには、人は言葉通りに一寸先を見ることも出來ない。同道を行く人は身に着くものをしつかりと搔合せながら、笠若しくはその他のかぶりものを一所懸命に片手で抑へて、たゞ眼前の一歩々々を雪だまりの中に踏みしめて行かなければならぬ。さうして日を通し夜を通した大荒れのあとでは、吹きだまりのため





鶴岡　山形縣鶴岡市。莊内平野の中心地。

に朝起きて見たら家が埋れて出口がなくなつてゐた話や、「ふきどれ」(吹雪倒れ)で死んだ人の話が、自然の暴威にまだおびえてゐる人達の耳に傳へられてくるのである。

私もまたこの吹雪の中に行惱んだ多くの經驗を持つ。

私が三年までそこに學んだ鶴岡の中學校は、私の村から五里あまりを隔ててゐた。もとより私は毎日五里の道を家から通學したのではなかつた。汽車も乘合自動車もなかつた當時にあつて、それはもとより不可能のことであつた。しかし慈愛の溢れた家庭に育つた少年は、家の戀しさに堪へ得なかつた。私はそこに學ぶ小學校以來の同窓と誘ひ

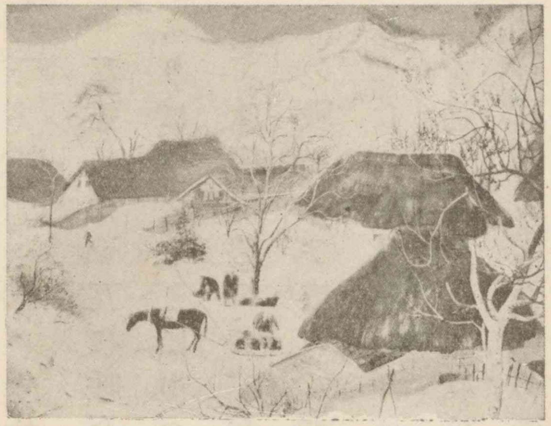
あはして、土曜毎にきつと家に歸つた。さうして一夜を溫かな床で寢たあとで、日曜の午後には又學窓へ歸つて來た。當時の莊內中學の習慣として、夏は蓙を着て、さきの尖つた菅笠をかぶつて、私達は每週五里の道を徒步で往復した。冬になるとこの蓙が赤毛布に代つた。二つ折にして、眞田紐を通して、肩に引きまとふのである。さうしてこの赤毛布には、吹雪と鬪ふ必要が常に附きまとつてゐたのだつた。

村を途中から出外れて、半里に餘る河原を通つて、最上川の渡しを渡つてから鶴岡に着くまでの間、そこに固より幾つかの村が點在する。しかし村から村までの距離は、十町、





二十町、一里——その間私達は野原や田圃の中を突切らなければならぬ。一つの村を出外れると、風の勢が急に劇しくなる。濃く、繁く、眼をくらますやうにたたきつける雪は、顏に當る每に言葉通りに痛かつた。野は一面に雪で、前に通つた人の足跡はすぐに吹雪に吹消されるため、道端の電信柱を見失ふと、私達は道を外れて、田や畑に踏み迷つたり、路傍を流れる小川にはまつたりする。眼をあげて行手の村を見定めようとしても、無限



雪の山家（大貫鐵心筆）

にちら〳〵する吹雪の白い闇は、一間先の道端の木をさへ見せぬやうにしてゐるのだつた。

私達はたゞ互に呼合ひながら僅かに殘る橇のあとをたよりにひた走りに走つた。さうして次の村の入口にはいつて吹雪の勢のやゝ和らいだことを感じたとき、私達は一つの戰を戰ひ拔いて來たやうにほつとした。私達の頬は紅くなつて、身體は汗ばんでゐた。しかし數十戸の僅かな村を通りぬければ、私達は又新しい戰の中に飛込んで行かなければならないのである。この戰は一面、元氣な少年にとつて一つの愉快な冒險であつた。しかしそれは又一面



において、先程離れて來た家庭の人達に對する、しみ〴〵とした、悲しく懷かしい、愛着の心を教へた。

## 一七　色紙の勳章

下村海南

この喜びいかにたゝへむ夢にあらず
生きて歸りしよ吾がますらをは

天地の神の御惠み國たみの
たすけありてぞ今日の日ありし

訪歐飛行の四勇士が無事に歸朝した。歡迎の幕がひつきりなく續いてゆく。

大正の十五年一月の二十六日、四勇士は平安神宮の參拜

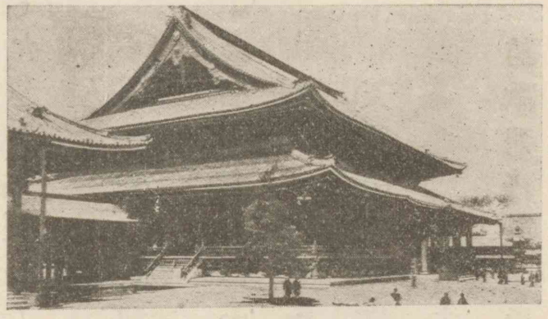
下村海南　名は宏。和歌山縣の人。法學博士。朝日新聞社副社長。

訪歐飛行　朝日新聞社の初風・東風二機によつて行はれた。大正十四年七月二十五日代々木練兵場出發。

四勇士　操縦士、陸軍航空兵大尉安邊浩。一等飛行機操縦士、河内一彥。機關士、篠原春一郎。機關士、片桐庄平。

平安神宮　官幣大社。京都市上京區岡崎町にある。祭神桓武天皇。

を終へて官民聯合の歡迎會に臨む。午後に入つて更に東西本願寺よりの招待とある。



東本願寺

　東本願寺前のあの廣い大通りから境內の廣場へかけて、底冷えのする寒い京の街も、こゝばかりは熱狂した群衆が歡迎旗を打ちふり〳〵、訪歐の四勇士に萬歲々々の聲を浴びせかけてゐる。

　寒い、寒い、いかにも寒い。案內する者、案內さるゝ者、三々五々長い廊下を右に左に、たゞ默々としてつながつてゆく。薄暗い、見上げる許りの廣々とした御影堂に入れば、歡迎の大衆は影の形を追ふ如く、四勇士目がけて外陣の中を右に左に雪崩れどよもしてゐる。



光暢法主　姓は大谷、伯爵、眞宗大谷派管長。

　禮拜を終へて、書院の一間に請じられる。事務總長稻葉昌丸師の歡迎の辭に次いで、光暢法主には、親しく四勇士に、訪歐の大使命の成就と佛陀の加護について懇切な挨拶をされる。

　西本願寺……冷々した薄暗い書院の一間には、ところどころ大きな火鉢に堅炭が盛上げられて、靑い焰がひら〳〵と舞ひ上つてゐる。が、何分にも部屋が大きい、襖が開け放

桃山　秀吉が桃山城に居て天下を治めてゐた時代。(二二四二―二二六〇)。

海北友雪　畫家。名は道暉、延寶五年(二三三七)歿、年八十。

しになつてゐる、寒い。

黒書院というたかと記憶する、いかにも黒ずんでゐる中に靜かに坐せば、暗い中から襖や壁に描かれたる花鳥の一線一線が、次第に浮上つてくるやうに見える。

　黒書院の小ぐらき中に燃えあがる
　炭火のほのほ青くゆれけり
　座につきて靜もり見れば床の間の
　壁の墨繪のうきあがり見ゆ

白書院に案内される。桃山の遺物として國寶に列せられてゐるといふ。裝束の間・紫明の間・二の間・三の間、つゞいて菊の間・雀の間なんど、そこには海北友雪をはじめ、狩野で



永德　狩野氏第五世の畫家、天正十八年(二二五〇)歿、年四十八。

了慶　姓は渡邊、狩野派の畫家。

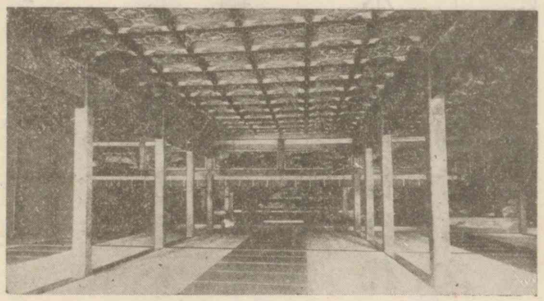
秀信　狩野祖酉。元和三年(二二七七)歿、年六十二。

了琢　狩野派の畫家、慶長年中の人。

興意　僧侶、狩野光信に畫を學ぶ。

探幽　名は守信、狩野家中興の祖。延寶二年(二三三四)歿、年七十三。

は永德・了慶・秀信・了琢・興意・探幽なんど名匠の筆のあとが窺はれる。どの間であつたか、鴨居が取外しの出來るやうになつてゐる。太閤が烏帽子など冠りものをした時に頭を下げたり首をかしげたりするのがいやだといふので、外すやうな仕懸けにしてあつたのだといふ。拵へ事か本當の事か分らぬが、太閤さんにふさはしい話のやうにうけ取れる。



西本願寺鴻の間

たしか鴻の間とかいふ大廣間にくると、こゝには本山一門の衆はもとより、本派の大學・中學・高女・小學より幼稚園に至るまで、先生から生

徒、さては父兄姉妹といはず、ぎつしりと群衆が鮨詰になつてゐる。

歡迎の式がはじまると、先づ執行長本多惠隆氏の委曲を盡した挨拶があつて、大學から中學、高女と、それ〴〵に生徒總代が、順次に立つて四勇士の前に歡迎の辭を朗讀する。次いで、はち切れさうな赤ら顔の小ぶとりの元氣さうな小學校生徒總代が、つか〳〵と四勇士の前に出て、はき〳〵した口調で、言文一致の率直な歡迎の辭を讀みあげたときに、

「僕は飛行機が好きです。」

といふ詞を耳にし、思はず何といふ嬉しい事をいふものか





と胸に應へる。間もなくつゞいて、

「僕も立派な飛行士になります。」

といふ詞が、びんと響いて來た。明るい詞、勇ましい詞、よくもいつてのけたものだと、この子供の嬉しい〳〵詞を胸の中で繰りかへす。

　飛行機は僕好きですと勇士の前に
　言上げしたり聞のよろしき

　僕も立派な飛行士になりますと幼き子が
　なにかゝはりもなく言ひ放ちけり

この無邪氣な歡迎辭に、何となく感傷的になり、胸が押しつまつて痛くなつて來たところへ、今度は六歲ばかりの可

愛いいたいけなぼつちやんが、自分の席に立上つた。心覺えのまゝ、あどけない歡迎のことばを、おど〱しく述べたが、

「私たちが、御祝ひにこしらへた、この勳章を差上げますから、どうか受けとつて下さい。」

といひをはると、並んでゐた三人の子供がつゞいて立上つた。

銘々に赤や黄や青や紫など、色とり〲の色紙で作つた勳章を手にして、四勇士の前に進んだときは四勇士はもとより滿座の人々の眼に淚がにじみ出て來た。そして安邊・河内・篠原・片桐の四人が、心から嬉しく子供の手から色紙の



勳章を受取つて、それをいひ合はしたやうに、各々の胸に飾りつけた時には、思はず滿場は嬉し淚をすゝりあげながら、歡喜の聲にどよめいた。

をさなきが色紙の勳章手に手に持ち
四勇士の前に捧げけるかも　(四番茶)

## 一八　鳳潭

池田林儀

昔、比叡山に偉い坊さんがあつた。大學者で當時天下に此の人の右に出るといふ者はなかつた。此の大知識が、或時、一山の僧徒を大講堂に集めて、お經の講義を始めるといふことになつた。いよ〱その講義の始まりの日が來る

池田林儀　秋田縣の人。文筆家。

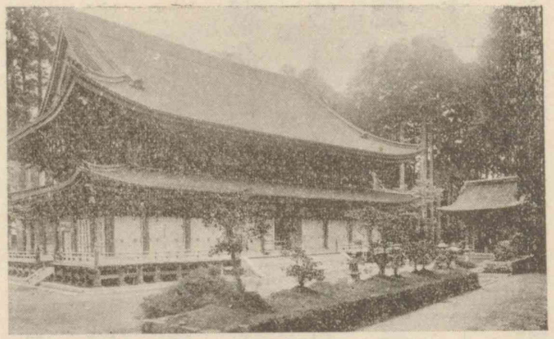
鳳潭　書僧。華嶺道人と號し、また詩文に巧であつた。元文三年(二三九八)寂、年八十五。

比叡山　京都府と滋賀縣との境にあつて海拔八四八メートル。僧最澄の開いた山で、山上に天台宗の總本山延暦寺がある。

と、今若し此の講義を聽き外したら一生の内にまたと聽かれまいと云ふので、大衆が續々と講堂に押しかけて、さすがに廣い講堂も鼠一疋入りこむ隙もない有様。しかしその講義は、餘りむづかしかつたので、誰にも解らなかつた。聽衆はみんな失望してしまつた。そしてその翌日には最初の日のやうに人が集らなかつた。三日目には更に少くなつた。四日目には二十人ばかりになつた。五日目には四五人に減じてしまつた。六日目にはたつた一人だけやつて來た。

その最後に殘つた一人といふのは、まだう若い小僧であつた。それが鳳潭といふ名であつた。大知識はたゞ一人の鳳潭を見て、





比叡山大講堂

「おい、お前一人では講義をやつても張合がないから、もう今日限りで此の講義はよしてしまはうと思ふ。」

と云つた。すると鳳潭は、非常に驚いたやうな樣子をして、

「どうして〳〵、此の講義をやめて戴いては困ります。これは是非終までやつて戴かなければなりません。」

「ぢやと云うても、たゞ一人を對手にしては、まことに講義がしづらうて叶はぬ。折角ぢやが斷念してほしいものぢ

や。」

「いや、どんな事があつても、止めて貰うては困ります。」

「それもさうだらうが、此の講義はなか〱むづかしい事ぢやで、お前には容易に解るまい。」

「どんなにむづかしうても、人間が解ることでしたら、一生懸命にやりさへすれば、私にだつて解らんといふはずがありませぬ。お師匠樣、どうか終までやつて戴きます。若し聽衆が少いと仰せられるなら、明日私が大勢つれて參ります。」

鳳潭の顏には、熱心の焔が燃えて居た。

「さうか、ぢや明日は澤山の人を呼んで來るがいゝ。それ





伏見人形　京都市伏見區伏見から出る人形で、土で造られ彩色を施してある。

ならやつてやらう。」

その日はそれで別れた。

あくる日となつた。定刻になると大知識が講堂に出て來た。見ると鳳潭がもうちやんと來て待つて居た。けれども、約束の聽衆といふものは一人も見えず、昨日と同樣、鳳潭たゞ一人が端然として坐つて居た。

「鳳潭、他の聽衆は。」

「はい、こゝに並んで居ります。」

見ると、鳳潭の周圍に並べも並べたり、伏見人形をごてごてと並べてあつた。これを見た大知識は、かつとなつて、

「こらつ、人を愚弄するか。」

拙僧の講義を聽くに人形を並

べるとは何事、無禮者奴が。」

大知識は鳳潭を怒鳴りつけて、すつくと立上り、さつさと歸らうとした。鳳潭は直ぐさま駈寄つて、

「お師匠様、暫くお待ちを願ひます。」

「いや、ならぬ。失禮千萬なことをする。」

「ま、ま、まあ待つて下さいまし。私の云ふことも一言聽いて戴きます。」

鳳潭の餘りに熱心な、餘りに眞面目な樣子に、大知識も一寸折れて、

「何ぢや。」

「お師匠様、最初お師匠様の御講義を聽かうとして、此の講





堂に集まつた大勢の人々は、眼もあり鼻もあり手足もある人間ではありましたが、今こゝに並んで居る伏見人形と同樣、聽く耳も頭もなかつた木偶同然のものです。頭數ばかり揃つても、全く人形に物を言ふと變りはなかつたのです。」

「うむ。」

「それでもお師匠様は、頭數さへ揃へばそれで講義の張合があると仰せられるのですから、今日はこの通り澤山の伏見人形を買つて、頭數を揃へて參つたのです。お師匠様、私はお師匠様の御講義を聽きに參つた者で、お師匠様のお顔を拜見に來たのではありませんから、是非最後まで講義を續けて戴きたいと思ひます。」

此の時大知識は、はたと膝を打つて、鳳潭の肩を堅く抑へ、「おう、よう言うた。拙僧の方が却つて大説教をされた。お前一人に講義をするのは、千萬人の無腸漢に講義をするよりも心强い。講義のしがひがある。拙僧はもう精一杯に講義をするぞ。悅んで講義をするぞ。」

かう云つて、大知識は、その日から鳳潭一人の爲に、力一杯、精一杯の講義をしてやつた。そして、鳳潭は熱心にそれを聽聞して、後年非常に偉い坊さんになつた。（敎育はなし草）

### 除日の講起

原念齋

歲暮に、菅得庵、林羅山に謂ひて曰く、「余未だ通鑑綱目を讀まず。請ふ先生明春を以て、余の爲に之を講ぜよ。」と。羅山曰く、「子の心誠に之を求めば、何ぞ來年を待たん。」と。卽ち除日を以て講起せり。（先哲叢談）

原念齋　名は善。江戶の人。儒者。文化三年（一八〇六）歿、年四十七。
菅得庵　名は玄同。儒者。
林羅山　名は道春。儒者。明曆三年（一六五七）歿。
通鑑綱目　支那の歷史。宋の朱熹が撰した。




## 一九　我が袖の記

高山樗牛

### 一　熱海の冬

熱海のふた月は、まことに樂しきあはれ深き冬の暮しなりき。よそならば、吹雪に閉ぢられて、日影も薄き冬の眞中も名にし負ふ暖地なれば、こちふく風も寒からず。睦月はじめの梅が香は、早くも春を告げわたりて、野邊のやけあとの萠えそむるは、人の心もときめく頃か。苫屋どもに岩海苔のかをれるもをかしく、蘆の屋に心細く立ちのぼる煙も

高山樗牛　名は林次郞。哲學者。文學博士。山形縣の人。明治三十五年歿、年三十二。
熱海　靜岡縣（伊豆）熱海町。伊豆半島東海岸の溫泉場。

大島　伊豆七島の一。
沖の小島　箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ（源實朝）
初島　熱海の東南海上にある小島。
魚見が崎　熱海町の南端。
日金・十國　日金山は熱海の西北方に聳えてゐる。その頂上は十國峠。

のどかなり。
海原遠く見わたせば、相模・安房の山々、雲か霞のすがたおもしろく、大島がねに立つ煙の風にたなびけるに、水や空とも分ちかねたり。「沖の小島」と誰がよみたりし、初島わたり漕ぐふなうたの、寄る波毎に聞ゆるもゆかしく、魚見が崎の此方より渚を傳うて、砂白く松青きほとり、濱千鳥の群れとぶ様もいとをかし。うしろには日金・十國の山々を負ひ、前には天空海濶の間に一灣の

熱海



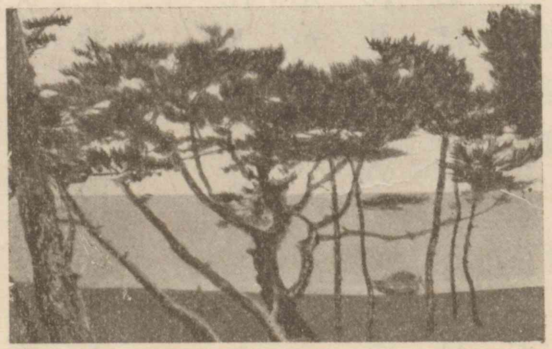


清見が關　平安時代にあつた關所。遺跡は今靜岡縣興津町にある。
江尻　同縣清水市の內。
清水　同上。
龍華寺　同縣安倍郡不二見村にある。法華宗。境內に樗牛の墓がある。

春を擁する豆南の風光は、筆にはなか〳〵に及び難し。

## 二　三保の春

松風遠く吹合はせて、波の音もかすかなる、物思まさる夕べなりき。われひとり清見が關の宿を立出でて三保の松原に遊ぶ。入日の影は雲にのみ殘りて、月いまだのぼらず。田子の浦わの夕風に、千鳥の聲もいと稀なり。江尻・清水をはや過ぎて、龍華寺の輪塔を右手に見つ。秋に寒き山おろしに入相の鐘を吹送りて、初春のあはれ一入深し。三保にたどり着ける頃は、月漸く



羽衣の松

羽衣の松　三保の松原の中程にあり、羽衣の傳説で有名。

のぼり、清見潟の水煙は關路遙かに立ちこめて、富士の高嶺に雪の色白し。見わたせば一帶の松林、木深くも生ひ茂れるかな。木立の篩へる月の明りに、殘んの雪の色冴えて、森の下道杳かなる、霞に落つる影もなし。波の音漸く近くして、われは羽衣の松に添うて立ちぬ。

羽衣の松は我が年久しく思ひこがれしものなりき。よしさらば、今宵は月と共に立ちあかさんかな。

松は夙く枯れて、幹の朽ちたるが殘れり。そのもとにゆかりを誌せる石ぶみありしが、月の光おぼろにして今は見えわかず。あはれ波の音と松風のみぞ、今も昔にかはらざりける。（樗牛全集）





三勇士　工兵伍長作江伊之助・北川丞・江下武二。

與謝野寛　京都の人。歌人。詩人。慶應義塾大學教授。

廟行鎭　上海より吳淞に亙つて作られた支那陣地の中央に位する部落。

二十二日　昭和七年二月二十二日。

# 二〇　爆彈三勇士

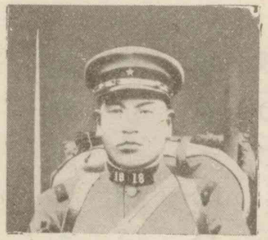
與謝野寛

廟行鎭の敵の陣、
我れの友隊すでに攻む。
折柄凍るきさらぎの
二十二日の午前五時。

命令下る、正面に
開け、歩兵の突擊路。
待ちかねたりと、工兵の
誰れか後れを取るべきや。

中にも進む一組の
江下・北川・作江たち、
凜たる心、かねてより
思ふことこそ一つなれ。
我等が上に戴くは
天皇陛下の大御稜威、
後ろに負ふは國民の
意志に代れる重き任。

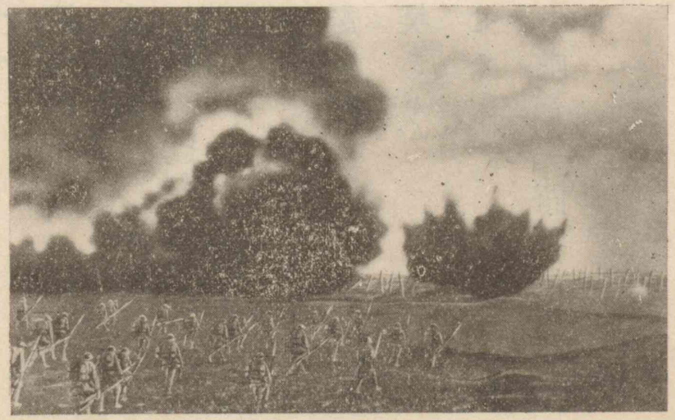
作江伊之助


北川丞

江下武二

いざこの時ぞ、堂堂と
父祖の歴史に鍛へたる
鐵よりかたき忠勇の
日本男兒をあらはすは。
大地を蹴りて走り行く
顏に決死の微笑あり。
他の戰友に遺せるも
かろく「さらば」と唯だ一語。
時なきままに點火して

抱き合ひたる破壞筒、
鐵條網に到り著き
我身もろとも前に投ぐ。
轟然おこる爆音に
やがて開ける突撃路、
今わが隊は荒海の
潮のごとくに躍り入る。
ああ江南の梅ならで、
裂けて散る身を花となし、







仁義の軍に捧げたる
國の精華の三勇士。
忠魂清き香を傳へ、
永く天下を勵ましむ。
壯烈無比の三勇士、
光る名譽の三勇士。

（陸軍軍歌・文部省唱歌）

## 二一　月雪花

芳賀矢一

春はハナミ、夏はスヾミ、秋はツキミ、冬はユキミ。夏のミだけが、月雪花三つの眺に關係はないが、夏の月夜の涼みは

芳賀矢一　福井縣の人。國文學者。文學博士。昭和二年歿、年六十一。

——蒲原の雪（廣重筆）——



また格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚・小僧にも、一年間の最大歡樂である。芋・栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、一般國民的の雅興である。

山寺の月

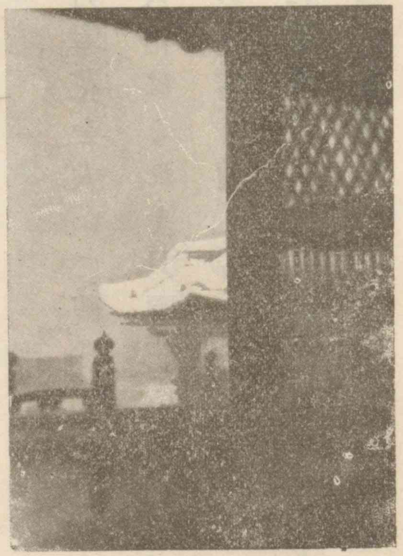
「お月さまいくつ。」の俚歌、「雪よふれ〳〵。」の童謠、月雪花の風流は子供の時から教へられて、我等の頭にしみこんでゐるのである。

月雪花を見て美を感ずるのは、歷史的懷舊の念が添ふからである。

我が國の櫻花は、唐人も高麗人も美しいといふに違ひないが、彼等の感ずるところと、我が國民の感ずるところとに

は、大きな逕庭がある。西洋人は觀月といふことに關しては、殆ど何の興味をももつてゐない。我等は子供の時から月雪花で教育されて大きくなつた。月雪花を愛づるといふ詩的教育を受けて來たのである。

風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて、活動社會を離れることは、隱遁者の所行であるが、少くとも皎々たる明月、皚々たる白雪、雲のやうな霞のやうな花に對して、これを眺めてゐる間は、いかなる人



清水寺の雪

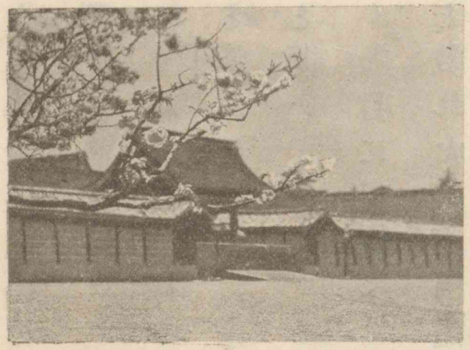
も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の效用は美術と同じく、人を高尚にし、人を温雅にし、人を悠揚にするのである。

我等日本人は古代から月雪花を大いに觀賞して、これを人事と結合した。高尚な人格はこれを月雪花に譬へる。「月に叢雲、花に風。」月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の蹉跌や死去に譬へる。さうして繁榮・隆昌・幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はすべてこの譬喩法を用ひてゐる。

我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々の美德を附加する。無情の物を有情化した上、更にこれを有德化するのである。







京都御所の花

月は公平無私、一點の汚のないものとして、光風霽月などと熟語にされて、君子人の赤心に比べられる。月を蔽ふ雲は、その光明を掩ふものとして、小人邪佞の徒になぞらへられる。また雪は、氷潔一點の塵のないことから、冷たい嚴肅なところを見て、潔白な精神や節操の動かないことを聯想する。花は爛漫たる美しさの忽ち風に散りゆくのを惜しんで、節義の士が身命を抛つのに譬へる。月や、雪や、花やに靈があつて、これ等の德を備へてゐるやうに感ずるのである。古人がかう感じて來たそ

保己一　塙氏、江戸時代後期の國學者。文政五年(二四八二)歿、年七十七。

南殿　紫宸殿のこと。

のまゝを承け繼いで、我等もさう感ずるのである。

月雪花を觀賞することの出來る我等は幸福である。盲人の學者保己一の逸事として傳はつてゐる話に、或時月に對して、

　花ならば探りても見んけふの月

といつた。また京都に上つた時、御所の南殿の櫻の花盛りと聞いて、

　目に見ねばせめてなでんの櫻かな

と戯れた。東海道で富士の山下を過ぎる時には、

　言の葉の及ばぬ身には目に見ぬもなか／＼よしや雪のふじのね





猿澤の池　奈良市にある。

鳰の海　琵琶湖のこと。

といつた。

月雪花の眺をほしいまゝにすることの出來ない民族は不幸である。月雪花があつても、これに附加された傳説をもたない民族も、また人生の興味に乏しい。我等は月雪花に對して、古來の文學を味はひ、國家を思ひ、品性を養ひ、國民性を知ることが出來る。月雪花を通じて、我が國民の歴史は髣髴として眼前に浮ぶのである。保己一は肉眼をもつての月雪花は見なかつたが、心眼をもつての月雪花は眺めることが出來たのである。

今や我が國は世界の日本となつた。我等の足跡は世界の上に印せられねばならぬ。猿澤の池・鳰の海の上に照る

月ばかりではなく、太平洋・印度洋の月をも眺める事がある。埃及の金字塔下・支那の萬里の長城の月、さてはアルプスの高峰の雪に攀づることもあり、西比利亞の吹雪に逢ふこともある。寒い滿洲征戰の跡にも、遙かアメリカの公園にも、日本の櫻が移し植ゑられる。新時代には多くの新名所が起らねばならぬ。後人をして俯仰感慨措く能はざらしめる佳話と文學とは、必ず多く新時代の人によつて遺されるであらうと思ふ。（月雪花）

## 二二　滿洲國の住み心地

上田恭輔

新滿洲國の面積は、日本帝國の確かに二倍はある。單に二倍と言つても、島國と大陸の差があつて、山も河も實に雄大である。行つて見ないと想像もつかないだらうが、三四千噸の大汽船が、河口から二千哩も上流に溯る黑龍江や松花江を試みに考へてもらひたい。太陽が、地平線から出て地平線に沒する蒙古の大平原を想像してほしい。二尺大の鮒、五尺もある鯉、六七尺の大鯰、鰌でさへも一尺位の大きな奴がどこにでも居る。とにかく滿蒙の萬物萬端、日本とは桁が違ふ。

滿洲國の總面積は七萬七千三百餘方里、人口は三千四百萬といはれてゐる。が、これは詳細に調査したわけでないから正確とはいへまい。しかし日露戰役の當時は、漸く千

上田恭輔　元滿鐵調査課員。

黑龍江　シベリアと滿洲との國境を劃して流れオコック海に注ぐ。
松花江　長白山北の諸水を聚め嫩江・牡丹江を入れて黑龍江に合する。

回々教徒　マホメット教徒。アジアの西方及びアフリカの北方に多い。

ツングース種族　アジア大陸の北部エニセー河以東に廣く分布する種族。

二百萬と言はれた滿蒙の人口が、僅々二十七年間に一躍して殆ど三倍に增したので、人口にあまり變りのない支那本土に比べて、新滿洲國の前途は實に有望といふべきである。

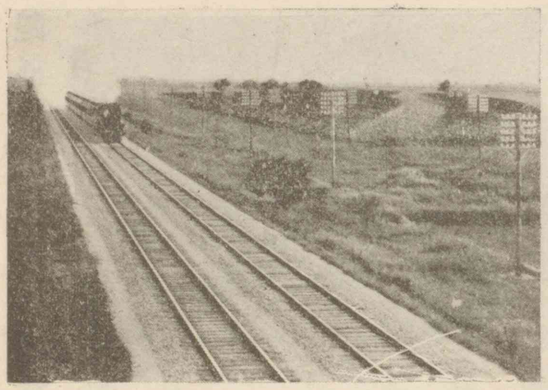
右の三千萬乃至四千萬の大衆の中には、幾多の異民族が入つてゐる。滿洲人あり、蒙古人あり、回々教徒あり、白系露人あり、日本人あり、アイヌに似た色々のツングース種族もある。しかし十中の八九は漢民族の支那人であり、その外に歐米人が若干加はつてゐる。是等の外國人でも、三ケ年以上滿洲國に在住した者は、一樣に市民權を與へられる。從つて滿洲國の政治に、住民が等しく參與することが出來る譯である。



洮南　奉天省北部の都市。四洮線の終驛。

海拉爾　黑龍江省西邊の城市。





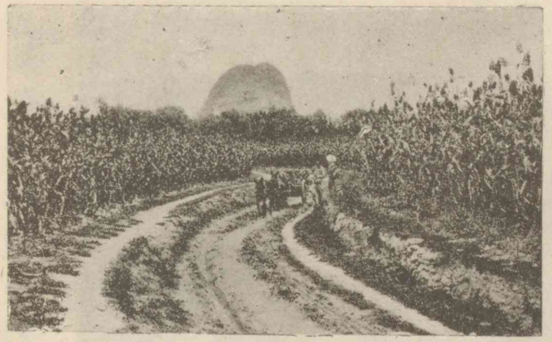
南滿洲鐵道

「滿蒙」といふと、多くの人が一望千里の大平原を想像する。けれども現に我が關東州租借地の如きは、遼東半島の尖端にある僅か二百二十餘方哩の岩だらけの土地なので、海岸に多少の平地があるだけである。しかし奉天以北になると、遙か東に長白山系を雲か山かと認めるだけで、西はそれこそ一望千里、一物の視界を遮るものもないのみならず、更に洮南以西の地、或は海拉爾地方、或は黑河の平

哈爾賓　吉林黑龍江兩省の境にある。松花江に瀕む。水陸交通の要地で、東支鐵道の中心。

齊々哈爾　黑龍江省省政府所在地。嫩江に瀕む。

原に立つと、正に天地は一眸の内にあつて、その偉大なる壯觀は、何とも形容の言葉がない。「揚子江の大を見ない者は支那を知らないものだ。」といふが、それよりも「滿蒙の平原を見ない者は、大陸の何たるかを解しないものだ。」といはなければならぬ。


高粱畑

沃野千里の滿洲ではあるが、その位置は、北に片寄りすぎてゐる。何しろ南の端の大連が、緯度に於ては我が國の仙臺と同じく、奉天は青森、長春は函館、哈爾賓から齊々哈爾になると、北海道の旭川から樺太の





大泊あたりに相當する。

まして四面海に圍まれ、暖潮の流れてゐる日本と、亞細亞大陸の奥にあつて、海を距ること數百里の奥地とは、地圖上の緯經の度數は略、同樣でも、寒暑共に程度が違ふ。夏は攝氏の四十度を越え、冬は氷點下三十五度乃至四十五度にも降る。で、その暑さ寒さは、天候に惠まれてゐる日本人では、到底想像も出來ないほど嚴しい。

暑氣の盛な頃になると、汗も乾燥して全身から〳〵になる。地上は陽炎が昇つて正視するに堪へず、微風も吹かぬ。扇風器の送る風も音ばかりで涼しくはない。外の方が暑いから、早朝に窓を閉ぢて、眞暗な部屋で、じいつとしてゐる。

オンドル 温突の朝鮮音。朝鮮及び滿洲地方に行はれる一種の煖房裝置。
ストーヴ Stove.

そんな炎天に、煉瓦を枕にしてぐう〳〵鼾をかいて晝寢をしてゐるのは、支那の下級勞働者である。世界中の何者も、かういふ頑健な勞働者との生存競爭には勝ち得ないだらう。

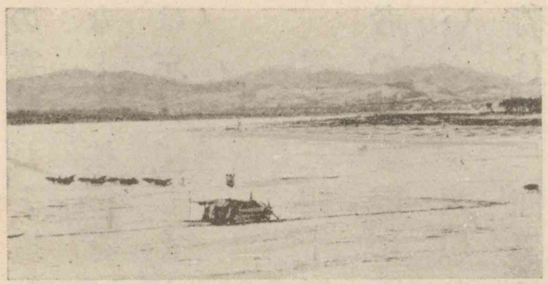
昔から、お江戸の眞中では、大寒の節でも、攝氏の零下五六度にまで氣溫の降ることは珍しい。しかし、こんな寒氣は滿洲國の住民から言はせると、まるで問題にならないので、外套なんかは忽ち「不要」と一喝して退ける。

と言つても、一面には室内の防寒設備として、彼等はどんな茅屋でもオンドルといふ全家の床そのものを溫める工夫がしてある。日雇人夫の小屋でも、石炭を焚くストーヴ



ペーチカ Peelka. 露語。露西亞に行はれる一種の煖爐。
フランネル Flannel. 毛織物の一種。

を据ゑつけ、晝夜を通じて華氏の六十度以上の溫度を保つやうにしてあり、中流以上の人士の家庭になると、ロシヤ式のペーチカ、或は蒸氣煖房によつて、屋内ならばフランネル一枚で樂に暮せるだけの防寒設備が調つてゐる。



松花江の水院子（氷上に建てた宿屋）

だから外出の時も、身分相當の防寒服があつて、たとひ零下三四十度の酷寒になつても、道を行く人に寒さうな貧相な風をしてゐる者は一人もない。男女老幼すべてが威風堂々、元氣滿々と歩いてゐる。

そこで、滿蒙の天地は冬期になると、山川草木すべて氷結

して、人馬共に東奔西走の好期となるので、交通運搬の期節が始り、全地に互つて活動が開始される。零下十度ぐらゐの寒氣だと、道行く人々が、お互に「今日は暖い上天氣で――」などと挨拶を交はし、鐵道現業員・鐵道守備兵等は外套などは忘れてしまふ。

零下三四十度となると、さすがに滿蒙の冬に住み慣れた者でも、實際に寒さが骨に沁む。「寒い」といふよりも「痛い」といふのが適切な言葉であり、この痛さを感覺しなくなつた時は、既に凍傷にかゝつた時である。悪性の凍傷に遭ふと、燒傷と同樣に生涯の片輪者になる。

齊々哈爾に入る我が騎兵聯隊

かゝる寒さになると、何もかも凍る。生の卵も三角なり四角なり自在に切れる。葱は枯木の枝のやうにぼき〳〵折れる。牛肉や魚肉も斧でたゝき切る。凍らないものはアルコールだけで、石油などはざらざらどろ〳〵した砂糖のやうなものになり、ビールやサイダーなどは、爆彈のやうに破裂して、瓶の硝子が粉微塵に飛散する。

一歩戸外に出ると、鼻の穴が忽ち凍つて、息が出來ない。勢ひ口から呼吸する。すると、鬚も睫毛も瞬間に雪が積り、

昨冬　昭和六年十一月。

伊能忠敬　千葉縣の人。神保氏。香取郡佐原町伊能氏の養嗣子となる。文化四年(二四六七)歿、年七十七。

幸田露伴　名は成行。東京の人。文學博士。

その雪が息の溫度で少しづつ解けて氷柱になる。人も馬もすべて顎に氷柱を何本となくぶら下げてゐる。さすがに丈夫な面の皮でさへ、三十分も戸外にゐると、堅くこはばつて、話をするのが不自由になる。

かゝる險惡なる嚴寒を冒して、昨冬齊々哈爾に突進した皇軍は、盡忠報國の尊い熱誠に燃えて餘念なかりしとはいへ、さぞかし辛かつたであらうと、心から感謝の涙なきを得ないのである。(新滿洲國寫眞大觀)

## 二三　伊能忠敬の晩學

幸田露伴

忠敬、年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歲にして

伊能忠敬

家をその子景敬に讓るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意專心、たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も圓滿に、最も美しく果さんことを期し居たりき。

凡そ才氣ある者の常として、己が欲せざることには一擧手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲する事にのみ身を委ねんとするは免れがたき習なり。たとひ己が欲せざることなりとも、その爲さざるべからざることとなる以上は、甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へて、わが爲すべき事をなすは、その人、啻に才氣あるのみならず、また實に德

量ある人なりといふべし。世に才氣ある人は多し。才氣ありて德量ある人は少し。年少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刀の肉薄きが如し、物を截ることはよくすべし、折るゝ恐は免るべからず。されば世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は、數へも盡しがたし。忠敬が算數・暦術の學を嗜み、且これをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、「伊能氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし。」といふを唯一の希望として、三十餘年一日の如く、只管その家業に丹誠したるは、實にその德量の大なるを見るべきなり。

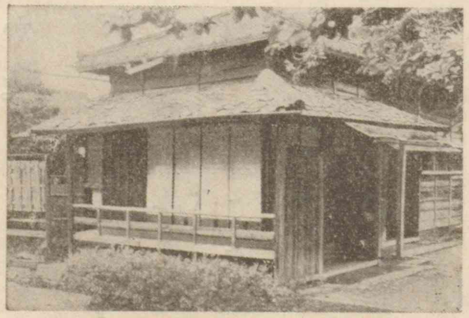
かくの如くにして伊能家は興りぬ。景敬は家を嗣ぎぬ。





一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、是に於て圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふることを得べし。この時は忠敬年既に五十歲、常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歲の時も前途多望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合もわが力を試みるべき處たり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當つて、始めて學に



伊能忠敬の書齋

佐原 千葉縣香取郡。成田鐵道の終驛。
深川 今の東京市深川區。

就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、靑年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。

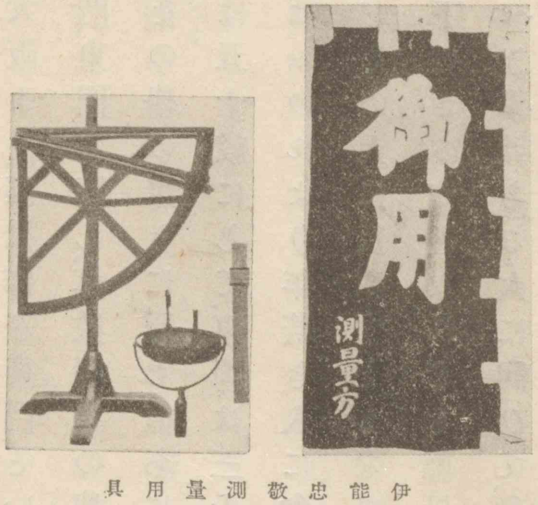
さるほどに、忠敬はその鄕里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一樣に笈を負ひて鄕關を出で、都門に遊びて師を尋ね學に就くところの書生と異なるところは、たゞその若きと老いたるとの差のみ。かくして忠敬は身をおのが好める學に委したるが、おのが滿足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。

高橋作左衞門 大阪の人。名は至時。曆學者。文化元年(二四六四)歿、年四十一。

をりから幕府には曆法改正の擧ありて、これがため特に大阪より、高橋作左衞門といふものを召されたり。作左衞門、東岡と號し、算數・曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服し、直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なりき。普通の人情にては、おのれより年若き人に會ひては、たとひおのれが學業などその人に及ばずとも、なほ強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、德量ある忠敬は、いかでか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて、拜伏するを厭ふべき、喜びてその門下生となれり。然れども、同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば屢、笑柄となしたり

といふ。

晩學の難きは、實に何れの世にありても、かゝる事情の存するに因るなり。是を以て、非凡の士にあらざれば、大抵自ら恥ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて墓穴に入るに至るなり。本來よりいへば、老いて學ぶは、たまたまその志の淺からざるを顯すのみ、また何の不可かあらん。況やまた何の恥づべきところかあらん。思ふに區々



伊能忠敬測量用具




たる群小の嘲笑も、忠敬に於てはたゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ。かゝれば忠敬と同門學生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明かなることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して、洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、終にその學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべきものなきに至れり。

かくて忠敬が、始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實にその齡五十五歲の時なりき。五十五歲といへば、人は頽齡用ふるに堪へずとする年齡なり。されど忠敬は氣力旺盛、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて喜色滿面に溢れ、

即日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が、事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの元氣勃々として燃ゆるが如き熱心を、胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟早老の人種なりといふ。これ豈我に伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。（露伴叢書）

○

わが前に生れて、その道を聞くこと固よりわれより先ならば、われ從つてこれを師とせん。わが後に生れても、その道を聞くこと、亦われより先ならば、われ從つてこれを師とせん。我は道を師とするなり。いづくんぞ其の年のわれより前生たり後生





韓退之　名は愈。字は退之。支那唐代の文豪。

白鳥省吾　宮城縣の人。詩人。

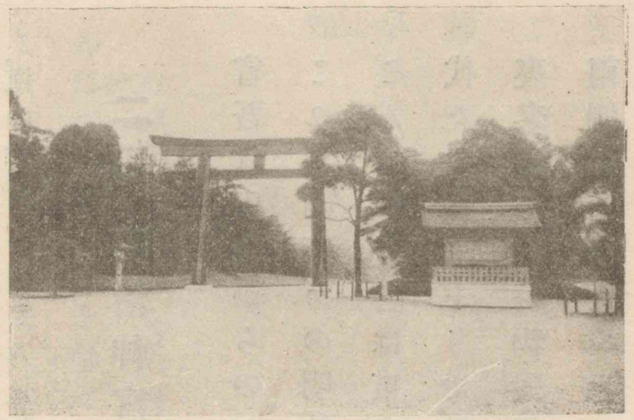
たるを問はんや。この故に貴となく、賤となく、長となく、少となく、道の存するところは師の存する所なり。（師說、韓退之）

## 二四 明治神宮

白鳥省吾

省吾は田舍からのお客のお供をして、
これで四度めの明治神宮參拜をした。
こんどのお客は東右衞門爺さんだ。
代々木驛に下りて、線路下の霜どけ路を踏み、
裏參道から寶物殿通りをゆく。
兩側のおびたゞしい樹に驚いた東右衞門は、
「此樹は後で植ゑたものですか、前からあつたものです

か。」ときいた。



明治神宮南參道入口

省吾ははじめてよく見ると、みんな名の知れないいゝ樹が冬ながら青々と茂つてゐる。

「こんなに揃つてるわけがないから、もちろん後から植ゑたのでせう。」といひかけて、枯草のなかに野生らしい二抱へもある欅を見つけたので「もつとも、あの欅などは前からあつたのでせう。」といひ足した。





「何しろ大したものですね。よくもかう集つたものだ。」と東右衞門は呆れる。

「ほんたうですね、どの一本を庭に植ゑても、すばらしいもんだ。選りに選つていゝものを各地から奉納したのでせう。そら、木の札がさがつてゐますよ、沖繩縣有志とか、廣島縣青年團とか………。」

「どんなにして運んで來たのですか、そんなに遠くから。」

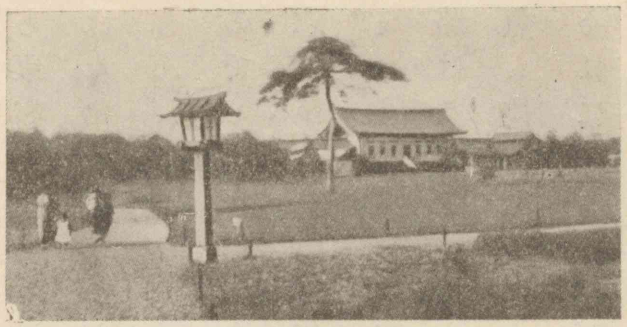
路はやがて廣々とした眺望に出た。

魚も住まぬきれいに澄んだ大きい池、

それに架る花崗石の二つの橋、

なだらかな傾斜をした、豹の皮の樣に美しく刈込んだ

芝生、



寶物殿

その遙か向うの平地に、薄赤い翼をして鳳凰のやうにうづくまる寶物殿。

省吾は見なれた景色ながら、「いゝなあ！」とわざとらしく聲をあげると、東右衛門も、

「かう二つ橋のあるのは二重橋を形どつたのでせう。」とうまいことをいつた。

寶物殿を拜觀して出ると、





二人の若い西洋婦人がまるで野原でも散歩してるやうな悠揚な態度で、

高く饒舌りながら池の方へ行つた。

この清淨な境の味ひ、傳統の尊さは、

やはり日本人でなければ感じ得ぬだらう。

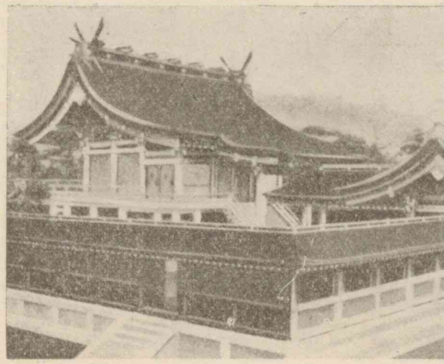
「紅毛人」「南蠻鴃舌」などいふ言葉を用ひた我等の祖父時代の心持も想像される。

暖い午後の日光、

廣々とした黄褐の芝生の果ては微かに煙り、その眞中に灰白の帶をひいた路を、

三々五々遠くゆく人影も美しい。

おゝ明治神宮！



明治神宮御本殿

いくら廣くとも廣すぎはしない。

いくら立派でも立派すぎはしない。

「春さきなどはどんなによからう、綺麗でそして眠くなるほど廣々してる。」

盡きぬ喜びにくど〳〵いふ東右衛門の言葉に交つて、槇の林の中でみそさゞいがチッチャ〳〵と啼いてゐた。清





何事の　何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ（西行法師）

らかな明治神宮本殿の大廣前には、カラコロと賑やかな日本の履物の音がする。會社員、學生、盲縞の爺さん婆さん、洋裝の子供、獵虎の毛皮の外套を着た商人、水兵、みな同じ感激に心の清まる表情をしてゐる。

「何事のおはしますかは知らねども、」有難さに拜殿の前で伏し拜み、

おゝ明治神宮、

檜造の古風な建築、屋根は檜の皮を細かく疊み込んだ氣品、

背景の青空に浮彫される古松の參差たる姿。

去りがての東右衛門を促して、鳥居を出た省吾は、共に再びふりかへり、神々しい全景をながめて恍惚とする。

元旦には雪降りにも拘らず十萬人の參拜人があつたさうだ。

今も砂利を踏んで新らしい參拜人がひつきりなく來る。

花崗石をくり抜いた大きい御手洗鉢には滾々と清水が溢れて、人々は先づ其處で漱したり、手を洗つたりする爲に、人人が群れてゐる。




阿里山　臺灣臺南州にある。標高約二二六〇メートル。

やがて省吾と東右衛門は二番目の大鳥居の下に來た。

臺灣の阿里山から持つて來た檜で造つたといふ驚歎すべく大きい鳥居の二本の丸柱、その頂上にはやはり檜を削つた二つの角材がやゝ弧をなしてどつしりと重つて居り、眞中に十六葉の菊の御紋が金色に光つてゐる、これは全く青空の下に唯一の晴れやかな國、純粹な日本の美だ。

省吾はこの前もしたやうに鳥居を撫でて見た。

東右衛門も「大きいなあ。」といひながら仰いだり撫でたりしてゐた。

笠井信一　静岡縣の人。貴族院議員。當時岩手縣知事。昭和四年歿、年六十五。
先月　大正二年一月。
先帝　明治天皇。

## 二五　明治天皇の御遺物を拜す

笠井信一

先月十七日、宮中より、地方長官一同に、午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、例刻に、參內致しましたところが、十一時すぎ、權殿參拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後、一年間、皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。卽ち私共は、この度、先帝の皇靈を拜する特別の御恩典に預つたのでございます。

そこで、私共は、光榮に感激しつゝ長く廣い御廊下に整列しまして、宮殿奧深く、權殿に詣つて、一人づつ、最敬禮を致し



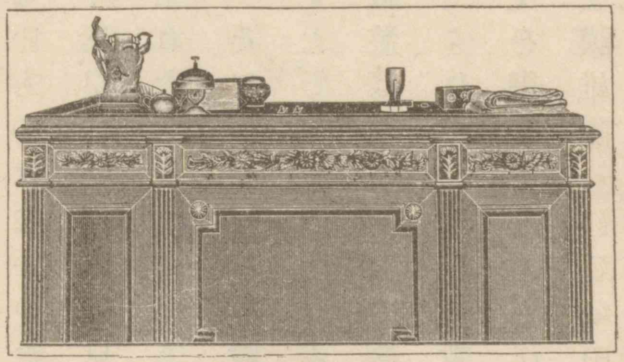


ました。蓋し、その瞬間は、何人と雖も、一種の靈感に打たれないものはなかつたでございませう。その權殿と申すは、平素、皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て、これに充てさせられたのでございます。

それから、更に、奧殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は、表御座所とも申し上げ、萬機の政を、御親裁遊ばされる處でございます。先帝には、長くこゝに在らせられて、德教を御敷きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられる等、宏謨雄圖、一にこの中で御定め遊ばされたのでございます。

然らば、どんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外なこ

とで、平常私共が參內の節、休息を許される御部屋の方が、却つて遙かに御立派である。しかも、餘り廣くない、二間續きの御部屋であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も、御椅子も、實に御質素なもので、絨毯の如きは、當初敷かれたまゝのもの故、後には色も大分褪めて參りましたので、侍臣から、御取換のことを、屢、願ひ出ましたが、御許がなくて、竟に今日に至つたのださうでございます。



御机（明治神宮寶物殿藏）

ストーブ Stove.

御部屋は、三方、壁を以てめぐらし、南の一方に、硝子戸があり、御机は御座所の中央に、南向に御据ゑになつてございます。この御構造を拜觀すると同時に、夏分はさぞ御暑い事でいらつしやつたらうと感じましたが、先帝には御暑さの御厭ひもなく、連日此處に出御あらせられたのでございます。これにつけても、

　年々に思ひやれども山水を
　汲みて遊ばん夏なかりけり

の御製を想ひ起して、誠に恐懼に堪へませんでした。のみならず、この御部屋には、ストーブの御設がございますけれども、三十七年の冬以來、御用ひがない。竊かに承るに、その

年の冬の或朝、例の如くストーブに火を焚いてございましたが、先帝出御遊ばすや否や、「火を消せ。」と仰せられる。侍從は、何故か分りませんが、たゞ仰のまゝに、火を消しました。さてその後と申すものは、如何なる酷寒と雖も、一切ストーブの御使用を御許し遊ばされなかつたとのことでございます。勿論大御心のほどを伺ひ奉るわけには參りませんが、侍從方の推測し奉る所によれば、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戰ひ、飢寒に苦しんでゐるのに、御同情を垂れさせられ、兵士と艱難を共にせんとの大御心に出でさせられた次第であらうと申すことでございます。それ以來は唯一箇の、小さい丸火鉢のみを、御使用遊ばされたとの御事。今その御火鉢を拜觀するにつけても、思ひ出されるのは、斯民の上を思ひやられたる御製、

桐火桶かきなでながら思ふかな
　　すきまおほかるしづが伏屋を

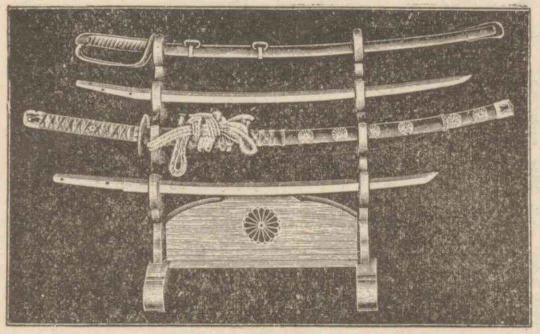
でございます。

この御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。この御部屋には、先帝の御學問所において、御使用になつた御遺物全部、そのまゝに据ゑ置かれてございます。これは、今上天皇陛下の大御心に出でさせられたる趣に拜承致しました。構造も、方向も、廣さも、御學問所と全く同一

今上天皇陛下　大正天皇。

テーブル　Table.

であつて、すべての御遺物も、昨年七月十三日、即ち先帝最後の出御當時の儘に、御備附になつてございました。床の間には、その當時の御軸物が掛けてあり、その前方には御劍數振横たはり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が、御机に接近することなどは、思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜觀する光榮を得ました。



御劍

まづ御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に燒痕がございます。　これは、先帝が御煙草を



召上つていらつしやつた節、臣下より政務を言上致しました處、先帝には、御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた折、煙草が墜ちて、この燒痕がつくやうになつたのだと申すことでございます。　さて、この燒痕のあるテーブルの羅紗を御取換へ申上げんがため、侍臣より幾度となく願ひ出ましたけれども、斷じて御許がなかつたとの御事。　蓋し何物でも、それにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる、御儉德の至と拜察し奉ります。

御硯箱は、明治二十年に、鹿兒島縣から御取寄になつた竹製の品でございます。　その中の筆は普通の御品で、我等臣

下の日常用ひる物とかはらないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに、御使ひふるしになり、墨も亦同樣で、一寸位に磨りへらされた品もございました。鋏も亦同じく普通市場にある品で、その傍に學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は侍從の方が何かの調べに用ひた儘、其處に置き忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと承つて、今更ながら御儉德の高きに感激し、自ら顧みて慚愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に、獅子の毛皮が敷かれてございます。これは、青山御所においで遊ばされた頃から、久しく御使用にな



ホワイトシャツ White Shirt.
ボール Board.

つたもので、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れるやうになりました。そこで、臣下より御取換を願ひ出ましたが、「なに、これでよい。」とて、御許がない。せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許を得た。しかし、適當の皮がないことを言上致しました處、何の皮でもよいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申すことで、侍從が「この邊が犬の皮です。」と説明して居られました。

その傍に、ホワイトシャツを入れる白いボール箱やうのものが、澤山に積み重ねてございましたから、「何に遊ばす物か。」と、侍從に尋ねました處、やはり、シャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとて、御手許に留置かせられた物

であるとのことでございました。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れて、表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる。そして、御不用になつた前の紙袋は、一枚たりとも御棄て遊ばさず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを、御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのでございます。實に、天下の物は用ひるにその途を以てすれば、一として無用の物はない。先帝は斯く萬機の政を聞召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。





又傳へ承るに、先帝が、皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀、及び慈善に關する費目の外は、務めて御節約に相成り、些にても冗費をば御省き遊ばしたと申すことでございます。一天萬乘の大君におはしましながら、禿びたる御筆を御用ひになり、破れたる敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか、皆これ、節すべきを節して、有用の事にのみ御用ひ遊ばさうといふ大御心に外ならぬことと存じます。

さて、御次の間には、造花や、彫刻や、種々な物品が備へられてございました。これを拜見いたしまするに、學校や展覽會などに行幸の節、御奬勵のため御持歸り、又は御買上げ遊

ばされたもので、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に、造花の如きも、格別のものでなく、何年前のものか、色も褪めはてて、殆ど裝飾の用を爲さぬものまで、そのまゝになつてございます。その他、美術工藝品の如きも、皆御獎勵のためで、俗人の道樂とは、全く趣を異にしていらせられます。

御製に、

千よろづの民と偕にも樂しむに
ますたのしみはあらじとぞ思ふ

とございますが、實にこのやうな御樂を求めさせられんが爲、先帝には、長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御蔭を以て、隆隆として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば、我等は、長い間、聖天子御一人に、非常の御苦勞をお掛け申上げましたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に、

國のためいよ／＼はげめ千萬の
民もこゝろをひとつにはして

の御製をも同時に服膺して、公人としても、私人としても、力のあらんかぎりを盡くして勵精し、協心戮力、擧國一致、以て國家に貢獻して、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓

ふ次第でございます。（岩手縣學事彙報）



# 國語讀本 卷二 終

國語讀本 新制版
（各卷 定價金六十錢）

大正十三年十二月十六日印刷
大正十三年十二月十九日發行
大正十四年二月廿一日訂正再版印刷
大正十四年二月廿四日訂正再版發行
昭和三年十一月一日改訂印刷
昭和三年十一月四日改訂發行
昭和四年三月十五日改訂再版發行
昭和七年十月廿五日改訂三版發行
昭和八年二月廿三日改訂四版發行
**昭和九年七月十九日改訂五版印刷**
**昭和九年七月二十一日改訂五版發行**

編者 上田萬年
同 柴田猛猪
同 鹽野新次郎
發行兼印刷者 株式會社啓成社 右代表者 布津純一
印刷所 啓成社印刷部

發行所 東京市麴町區丸ノ内三丁目六番地
株式會社 啓成社
電話丸ノ內(23)二六八六番
振替東京一二〇五五番

morikazu
morikazu
Shimizu

山陽中學校 一A
清水守和